

人の演説を分類して見るならば、頗る興味あることだらうとは常に私の胸を來往してをることである。同じく雄辯家と云はれ、演説家と云はれる中にも亦或は熱辯家と云ふやうなものもあり、又は能辯家だとか、或は快辯家だとか、又は饒辯家だとか云ふやうな種類から、或は馱辯家だとか、又は速辯家だとか、或は訥辯家だとかさては理辯家だとか云ふやうに、幾通りにても區別することが出来るであらう。かう云ふやうに、その辯舌に依つて區別したならば、かく區分して、現代に於ける辯論家の一覽表を作製したならば、如何に興味があることであらう。私は必ず面白いものが出来るに相違ないと信じてをるのである。

こゝに南極探検を語るは、確かに適例であるまい。併し此の種の計畫を辯論に依つて成功しやうとするものにあつては、或は他山の

石であらう。然り、而して南極探検を企圖した白瀬中尉の人物の如何は、世人は少しも知らなかつた。そこで三宅博士を初めとして、大隈伯などが盛んに紹介演説をされたので、大部分のものは、こゝに白瀬中尉を信用するやうになつた。併し人を疑ふ島國根生の國民他の美點をけなして喜んでをる雅量に乏しい國民は、眞面目なる實質よりも、その果敢ない猜疑心——「若しや」と云ふ心を満足さすには世間に名の知れた名士の名前を並べなければ承知しない。彼等はその實質を以つて信用すると云ふとが餘りないのである。そこで若し南極探検隊の後援會に大隈伯とか、三宅博士と云ふやうな名前がなかつたならば、如何に白瀬中尉に實質あり、修養あり、決心があつても、到底當時の成功の十分の一だも成功することが出来なかつたこと、信ずる。實質の貴重なることを知らざる世人は、無名の一白

瀬中尉を信任することは六ヶ敷かつたらうと思ふのである。
 この白瀬中尉の主唱した南極探検隊の後援會が其の後援事業を熱心に繼續して、倦まずに猶ほやつたと云ふことは、實に賞すべきことであつた。併し後援會のなしたつた仕振り、即ち作戰計畫に至つては、遂に拙劣であつたと云はなければならぬ。
 この南極探検隊の後援會の中堅とも云ふべき幹事何某氏の如きは如何なる方法に依り、どう云ふ手段を取つて、その實績を擧げやうかと苦心せられてをると聞いてをつた。その責任者として、不斷に奔走せられてゐたと云ふことも聞いてをつたのである。
 その頃私は一夜神樂坂を通つてをると偶然にも高等演藝館で南極探検隊後援會の事業の一部として、活動寫眞を見せてをると云ふことを知つた。そして頗る大きな文字を以つて、所謂大々的の廣告を

してあるのを見た。そこで私もつい入る氣になつて入場したのである。私は入場して、頗る不快に感じたと申して置きたい。その廣告した處の少しも見るに由なく、殆んど兒戯に類するものであると云ふことを知つて、實に意外に堪へなかつたのである。
 その寫眞の如きも、南極探検に關するものは、唯だ申譯許りの一部分に過ぎずして、その外には下宿屋小路にでも聴くが如き薩摩琵琶、又は劍舞の寫眞と云ふやうなものが大部分を占めてゐたのには實際に於いて驚かざるを得なかつた。併し幹事の何某氏の演説があるると云ふので、私は今までやつてゐた例の餘興は、眞に餘興であつて、何某氏の演説こそ當夜の中心であらうと思つたのである。それ故に私は何某氏の責任の重いことを思ひ、更に平生から何某氏は南極探検隊の爲には、殆んど寢食を忘れて東奔西走し、後援會の實を

擧げやうと努めてをられると云ふことも傳聞してゐたので、私は何某氏の如何なる人物なるかを知らなかつた。が、併し充分に敬意を表して、その演説を聞かうと尙かに待つてをったのである。

三

回 粗野至極の態度 特に何某氏が今夜は壇上に起ち、辯舌を以つて聴衆の肺腑を貫かうとせられるとすることを私は私の平生の立場からして、何某氏は必ず大に聴くべく、聴かせべき方法を取ることであらうと思つてをったのである。然るに甚だ意外であつた。私は苟くも南極探検隊の後援會の幹事何某氏を會衆に紹介する人は、社會に地位ある紳士であらうと確信してゐたにも拘らず、こゝに「唯今から何某先生の御演説があります！」と何某氏を會衆に紹介したものは、實に白面の一書生に過ぎなかつた。私はこゝでもう第一に失敗してをると思つた。折角に同情を以つて入場した會衆に對して、甚だしき失禮を加へたと思つた。否な、一般の聴衆に對して失禮である許りでなく、演説すべく壇上に起つた何某氏その人に對して亦少からぬ失禮をしたものであると思つた。この不愉快の念は、決して私一個人としての不愉快ではなくして、當日こゝに會した人々の必ず胸に湧起した處であらうと思ふ。私は此のことを私の立場からして、聴かせるべき準備に於いて、既に甚だしき失敗であつたと云ふことを毫も躊躇せぬものである。

この失禮極まる白面の一書生の紹介の辭があつて後に、襖を排して奥から出て來た人は——と見れば、黒い羽織こそ著てをった。けれど思ひがけもなく著流しであつたのには、更に一驚を喫したので

ある。私はその無禮と云ふべきか。公衆の前に著流しの儘に立つた紳士(?)を見て、唯だ駭く許りであつた。無論、私は此の人が何某氏であらうとは信じなかつた。否、今日唯今までも、あの紳士——著流しの儘に演臺に立つた人は何某氏その人ではなく、何某氏に何か止み難き差支でもあつて、出席することが出来なかつたので、何某氏の換玉ではあるまいかとさへ思つてをる位である。あの著流しの人を何某氏とは信ずることが全然出来ぬのである。

この會衆に對して禮を失したる著流しの紳士は、演壇に立つた。而して其の演説を始めたのである。併しその演説たるや、日本國民の代表としての白瀬中尉を説明し、南極探検の事業を語ると云ふ重大なる目的に向つて爲すべきものとして、この種の目的に對して頗る不似合なるものであつた。この演説に依つて、我が國民の志氣

を鼓吹し、激勵し得やうなどは、如何にしても考へることが出来なかつた。殊に私の不愉快に堪へなかつたことは、不謹慎なる言葉を臆面もなく使用して、つゆ程も憚らなかつたことである。恚る場合に於いて、最も誠しむべき言語を弄してゐたことであつた。それから其の態度の粗野至極であつたことで、あの著流しと云ふのが既に第一に失禮である上に、更に粗野なる態度を持するに至つては、實に言語同断と云ふべきである。私は最も甚だしい失態であつたと思ふのである。

それから其の演説に就いて云へば、唯だ叫ぶ——何事をか徒に罵ると云ふ外にはなかつた。繰返して云へば、唯だ絶叫し、罵詈するのみに過ぎなかつたやうであつた。それから特に私の目に著いたことは、握拳を以つて、頻りにテーブルを叩いた。が、少しもその使

用法を知らないことであつた。到底ゼスチユアはなつてをらなかつた。それ故に甚だしい不調和を來してをつた。それ故に演説は宛然車夫馬丁の輩が細暖簾を潜つて、飲み且つ食ひながら罵り合つてをるとしか思へなかつた。聽者のことも考へなければ、自己の品性と云ふことも顧みない。而して此の南極探検と云ふことが國民的事業であると思ふことも思はなければ、國民の名譽と云ふことも眼中に置かず、後援會の中心となり、中堅ともなるべき何某氏であると云ふことも自覺しないものゝやうに見受けられた。少くとも私は左様に見るより外にはなかつたのである。我が國民に訴へる聲として、は、どうしても受取ることが出来なかつたと云ふことは、こゝに今日に至るも、猶ほ此の種の計畫を企圖する人達の爲に、私は大きな聲で申して置きたいと思ふのである。

かう云ふやうに、徒に絶叫し、無暗に何事をか罵倒することのみを能事としてゐたが爲に、遂に其の演説は四分の一にも達せぬに、もう聲は嘎れ、唾を飲む、咳嗽をすると云ふ滑稽に陥つて、聽衆は遂に笑ひどよめき、嗤笑の聲は三十分以上に渡つたのであつた。かくの如きものは、到庭國民に訴ふる眞面目の聲と認めることは出来ない。南極探検後援會の如き意義ある大計畫の中心人物と信ずることとは出来ない。空前の大事業を完成せしめ得る人物とは思へないのである。唯だ書生の其の場丈の怪氣焰とより外には考へられなかつたのである。

四

回 江原先生の忠告
かの代議士の根本正氏は、殆んど年毎に幼年

者飲酒取締法案を帝國議會に提出してをる。然るに不思議にも、その提出理由の説明をやれば、その度毎に否決せられる。そこで江原素六翁が或時根本氏に「根本君、提出案の理由を説明することをよし給へ、君が説明すれば屹度否決となるのだから、寧ろ説明しない方が宜しい」と忠告を與へられたと云ふことを聞いてをる。即ち説明せざるは、説明するに勝るの効果があるからであらう。私はこゝに再び言を大きくして云ふ、あの著流しの一紳士は、南極探検後援會の幹事たる何某氏その人ではなかつたらうと。若し何某氏にして、この江原素六翁の根本氏に與へたる忠告を學んだならば、決してあゝ云ふ失敗もなかつたであらう。否な、私は江原翁の忠告を學んで欲しかつたと思ふのである。

然り、而して眞の雄辯、赤誠を披瀝した演説であるならば、人を

動かすことも亦多大であつたらう。百の活動寫眞よりも、千の劍舞よりも、その効果は著しいものであるに相違ない。南極探検後援會の如き國民的計畫をして、その實を擧げしむるには、この雄辯に依るが最も宜しいと考へる。私はあの時に殊に「こゝに眞の雄辯ありしならば」と云ふ感じを痛切に催したのである。私は前に云つたやうに、この夜の演説は、先づ其のやり方即ち使用法に於いて大なる誤りをしてゐたと思ふてをる。誤れる方法を取つたが爲に、折角聽かせるべきものを聽かせることが出來ずに終つた。聴衆が辯士を嘲笑したことも、その原因は辯士にある。辯士自ら侮つてゐたが爲に、周圍のものも亦眞面目に聞くことが出來なかつたのである。

回我輩の立場から 毫も私は何某氏を知らぬ。それ故に憚ること
 を云ふのは、何某氏に對して甚だ氣の毒である。が、私は私の立場
 から批評を下すのであるからして、私の觀察した處を容赦なく述べ
 る外に致方がなかつたのである。そこで私は此の夜の演説の缺點を
 云へば、第一に態度に於いて全然失敗したことである。若しあの人
 が眞の何某氏であつたならば、決して著流しなど云ふ無法なことは
 しなかつたらうと思ふ。それから第二には聲である。あの重任を負
 へる後援會の幹事何某氏にして、唯だ單に罵詈雑言、絶叫するを能事
 とし、車夫馬丁すらも、猶ほ使用せざるが如き不謹慎の語を使用し
 而かも四分の一にも達せざる中に聲を囁らすなどは、その用意に
 於いて非常なる不注意であつたと思ふ。第三には其の組織がなつて
 ゐなかつたことである、その内容の貧弱であつたことである。それ

から第四には場内の聴衆心理と云ふことを全然考へなかつたこと
 ある。當夜の會衆をよく觀察しなかつたことである。だからして口
 を開けば、直ちに何事かを罵ることもなつた。若し演説者にして
 深く周囲の状況を察して、最も能く調和するやうにやつたならば、
 あれ丈けの失敗はなかつたであらうと——私は非常に不愉快に思つ
 たのである。
 そこで私はあの人が眞に責任を知る何某氏であつたならば、あの
 失敗はしなかつたであらうと思ふ。あの不覺は取らなかつたことで
 あらうと思ふ。私は今日に至るも、猶ほ當夜著流しの儘で壇上に立
 ち、何事をか絶叫した不作法な紳士は何某氏ではあるまいと思つて
 るのである。私は敢て人のことを悪口し、罵詈雑言することを好まぬ
 のである。併し私の立場からして、つゆ程も遠慮なく、こゝに嚴か

に批評を下すことを辭せなかつた、責任を以つてやつた。私は何某氏には、何等の恩怨もないものであつて、この批評の如きも亦私の聞いた處を聴衆の一人として、思つた丈け、感じた儘を語つたまで過ぎないのである。然り、而して此の忌憚なき私の批評にして、若し辯舌道に志す人士の参考ともなるならば、蓋し私のみ幸ではないのである。

帝劇にて

一

回調和せる態度とは豫期せぬ好機會に接した。この當日に於ける辯士の批評を致すならば、一體澁澤男の顔は眞面目になればなるほどに愛嬌のある顔である。それ故に澁澤男の云ふことを精神的に感ずる感じは非常に柔かである。それに加ふるに高い脊丈けと能く肥満した體軀との調和が恰好に取れてるのであるからして、その態度は、如何にも柔かに感ぜられる。併し此の柔かにあると云ふことは、先天的のものであつて、決して修練して後に得たものでなく、眞に天與の恩恵と

も云ふべきものである。こゝに於いて澁澤男はどう云ふ場合に立たれても感じが好い。如何にも優しいのである。かるが故に其の演説は聴くものに強い感動を與へると云ふことは、或は出来ないかも知れぬ。けれど誰にも能くなし得ないやうな難問題を解決するとか、不愉快極まることでも、猶ほ能く心から聴くものを納得させると云ふ容貌と態度とが便宜を持つてをるかやうに思はれる。

三月の二日に帝國劇場の開場式があつて、私も聴衆の一人として列した。が、見てをると澁澤男が正面に腰掛けてをるのがわざとらしくない。私は舞臺との調和に於いて、つゆ程も半分なく、殊更らしい處もなかつたと思ふ。それから男爵は立つて、壇上に進み、演説をされたのである。が、この人の壇上に於ける癖は、左の手を腰にあて、——これは能く演説者のやる態度である。が——右の手を

軽くテーパーの前に置き、話すに連れて、その上半身を折々前に傾ける。併し常に顔の位置が垂直なる爲に、前に傾けるのが餘り痛く見えない。かう云ふやうにする時は、言葉の力あるものを一層強く感ぜしめて、即ち調和の好い強味を感ぜさせる材料となるかのやうに思はれたのである。事實に於いても亦左様であつた。私共に非常に愉快に感ぜられたのである。

この體を搖がすと云ふことに就いて、最も酷く私の感じたのは、唯今の慶應義塾長をしてをる鎌田榮吉氏の態度であつた。尤ももう久しく氏の演説を聴かないのであるからして、今日も左様であるとは云へない。が、氏が大分師範學校長をしてをつた頃の壇上の態度は、殆んど全身を搖がすと云ふ程であつた。それが——あの脊丈けの高い人であるからして、更に著しく感ぜられたもので、氏の演説

が如何にも理路井然、所論該博なるには、何人も感服した。確かに傾聴せしめられたのである。が、その膝から上を絶えず揺がして、刺戟が餘り烈しいので、その頃の生徒の間では、窃かに氏の態度を評して『波乗り船』と云ふてをつた位である。

由來、その脊の高い人は、多く其の體を揺がすやうで、巖谷小波氏の如きも亦左様である。どうも長身の人に取つて、これは免れ難いものゝやうに思はれる。然るに澁澤男のは、それが殊更に目に付かず、如何にも自然に見えるのであるからして、私共は感服せざるを得ない。若し慾を云へば、も一寸脊丈けが高かつたならば……好いだらうと思はれるのである。

二

回廊と其の態度と 然り、而して澁澤男は軽く右の手を机に置くが、その置き方は普通のと違つてをる。竹越氏は軽く握つて、内側にカトプをこさへて、指の脊を机につけてをるからして、自然に肱が張る、これは燕尾服を著た時には大に調和的に認められる。が澁澤男の肱は、寧ろ脇腹にくつ付いてをる。それが話しの進むと共に、不知不識の裡に何か机の上のものをつかひかのやうに、五指をはなしてはあろしする。丁度雛祭りの時に撒いたあられでも拾ひ集めるかのやうに見える。これは論旨が如何に強くとも、又弱い時でも、演説される間は、絶えずやつてをること、寧ろ態度と云ふべきものでなく、これは其の人の癖であらう。私は澁澤男の癖と云つて差支へないと思ふ。この癖と云ふものは、餘りよいものではないのである。

それから澁澤男の態度の中で、正面を切ることの旨いには、流石に老巧の演説者であると思つた。この正面を切ると云ふことは、西洋などでは、或は役者が演技を終つて入る時とか、或は演説者の側面に控へてをる友人の方に顔を向けて、その友人から供給された材料を語る時などに、恰も同意を求めるかのやうに、その面を見詰めるなど云ふことは、決して珍らしいことでない。併し之れはよくわざとらしくなるものである。が、澁澤男のは、如何にも自由であつて、少しも厭味がない。四方の観客を見廻す様子が如何にも自然であつた。これは場慣れた後に出來る技術であつて、決して私共がわざと爲すべきものではないのである。

この澁澤男が當日は、先づ現代社會の知識、名譽、財産及び技術の各階級を代表したる観客に對して、如何なる用意を以つてせられ

るかといふことは、私の最も注意した處である。更に詳しく云へば當日は帝國劇場の口切りであるからして、その計畫設置の所以、抱負、希望と云ふやうに、こゝに云ふべきことは込み入つて、六ヶ敷材料で、更に大きく云へば、帝國劇場が社會にする開戦の第一日であるからして、その云ふ處が拙劣であれば、随つて劇場の將來に關することも多大で、又餘り巧みでも妙でもない。私はかう云ふやうに考へてゐたのである。

三

回 巧妙なる雄辯哉 然るに演説の組織は、最初は至極莊重であつた。が、この時間は短く、直ちにくだけて、それから帝國劇場の使命、抱負と云ふやうなことは、最も巧妙なる比喻を以つて説明し、

之れを結ぶにわざとらしくない見物人の責任と云ふことにして「……帝國劇場は、決して吾々の獨占事業でなく、相互の事業である」と話された處などは、實に巧妙なものと思つたのである。

澁澤男が初に莊重に出られた時には、どう云ふ御託宣があるのだらうかと一同は、片唾を飲んでゐた。が、こゝに至つて、こちらも膝を崩して開いてをると隔もなく、打ち解けて出られたので、こゝで一本參られたやうに思つた。何故かと云へば、澁澤男の話は、決して帝國劇場の創立者としての説明でなく、相互間の説明で、澁澤男と一同とは別人でなく、この帝國劇場と吾々とは他人でなく、親類であると云ふことを語られたからである。これが柔かで穩當であるものであつたからして、聞くものゝ耳にも亦非常に愉快であつたのである。

私は澁澤男は蘊蓄が深いので、演説も實に旨いものであると云ふことは、兼ねて聞いてをつた。が、斯く迄も巧妙なる雄辯であらうとは知らなかつた。私は之れ迄に一度澁澤男のスピーチを聞いたことがある。それは澁澤男が渡米團と共に、歸朝せられた時に、同志と男爵を招待した時で、その時には一寸したテーブルスピーチをやられたのである。併し當日は會合してをるもの多くが精神的、宗教的のものであつた所爲であつたか、そのテーブルスピーチも亦眞面目なるものであつた。それ故に私としては、男の自由なる演説を聴くのは、この帝國劇場の開場式の當日が初めてであつたからして、随つて私の興味も亦深かつた譯である。

この演説の中に澁澤男は、帝國劇場は位置及び建物としても好いコントラストを有する即ち隣は警視廳で、高層、嚴然たるものであ

るに對して、こゝは瀟洒たる建物、丁度五條の橋に於ける牛若丸と
辨慶で、白き此の帝國劇場は、當然あの優しい牛若丸で、七つ道具
殿しい山法師辨慶は警視廳であるといはれた。が、それと同時に、
私は帝國財界の重鎮たる澁澤男と此の帝國劇場とのコントラストも
亦男の話された巧妙なる比喩で説明されて餘りあるやうに思つて、
頗る面白く感じたのである。よき役者は己の立つ舞臺をよく見させ
劇を大きく見させ、價値あるものとならしめるものである。が、こ
の巧好なる澁澤男の演説の如きも亦それであると云はざるも得べけ
んやである。

(11011)

四

回瀟洒なる才度？
それから續いて竹越與三郎氏は西園寺侯の祝

辭を讀まれた。が、その態度は實に瀟洒たるものであつて、舞臺の
椅子に構へてゐた三又氏が徐に立つて、壇上に進み、左右を見廻は
し、左手を下げ、右手の甲を机につけ、足を揃へて一同に禮をした
その態度は、如何にも當代比儔なき才子の態度——云ひ得るならば
才度——であると認められた。三又氏は、當時の西園寺侯の祝辭を評し
て日本新聞紙上の『讀畫樓閑話』中に『福澤桃介氏は、西園寺侯の祝辭
頗る面白し。中に就き、參列の光榮とか、何とか、月並のことを並
べずして、參列の愉快とやりたるは、流石に粹然侯の面目なりなど
申され候……』と云はれてをる。が、私は移して以つて、粹三又氏の
態度を評するの語としたいと思ふのである。
それから——その次ぎに林董伯の演説があつた。この方の態度は
如何にも魁偉で、その便々たる腹、その肥大なる體軀を惜氣もなく

(11011)

充分に見せ、その腕を思ひ切り張り、左の手を垂下して、右の手はボタンを弄びながら話を進めて行かれるのは、申分のない態度であつた。三又氏は林伯の當日の演説を評して「……輕妙にして洒脱、些しの士氣なく、矢張り歐洲にて磨をかけたる江戸人の演説にて、諷刺やら、諧謔やら、追憶談やら取雜せて語る中に、一種の教訓あり小生の狭き見聞にては、同伯は卓上演説の語り手としては、當世多く其の匹儔を見ず候」と云はれてをる。が、事實に於いて皮肉もあり骨を刺すやうな處もあつたけれど、それが非常に面白く聞かれ、思ひ出し話しが亦少しもわざとらしくなかつたのである。

唯だ三又氏が云はれたやうにあつたのは事實かも知れない。が、私は澁澤男と林伯との演説——この帝國劇場の開場式に於ける——を比較して、後者の演説中の比喻などに就いて、今少しの手加減を

要するのではないかと思つたのである。更に林伯は演説をしてをられる間に水を求められ、それからして聊か調子を取外して、かん高くなつたが爲に、具合の悪くなつた咽喉をうるほした事などは、テーブルスピーチに慣れてをる方のスピーチとしては、不用意であつたと云ふことが出来る。私は思つたのである。併し演説の終つた時に、飲み残してあるコップの水を横に向つて、靜かに飲みほした手際に至つては、實に用意周到なるもので、私はかう云ふ手際に於いては、今日の演説家中に、かの林伯の右に出づるものはあるまいと思ふた。こゝに至つて、流石に竹越三又氏の評せられたことの所以なきにあらざるを知ることが出来るのである。

第四篇 資料

良工苦心の痕

□俳優と宗教家と　カンタベリー大僧正が或時俳優のガリリツクと會談して「吾々宗教家の聴衆を感動せしむる度合と俳優諸君が舞臺の上で観客をチャームする程度とを比較して見る時は、この上もない遺憾なことではある。が、吾々は諸君のそれに及ばないやうである。否な、近頃は非常に此の傾向が著しくなつて來たと思ふ。が、是れはどう云ふわけであらう？」と質問せられたことがある。この時のガリリツクの答は「貴下等の御取扱ひになることは、總て事實の説

明である。然るに之れに反して、私共が舞臺の上で演ずることは、殆んど全く事實でない。架空の事である。併し私共は之れを取扱ふに方つて、その演ずることが事實でないこと云ふことを知りながらも猶ほ仕組んだもの——架空の事實であると云ふことを考へず、飽く迄も私共は事實としやう、出来るだけ事實に見せやうと努める迄である」と云ふに過ぎなかつた。これは別に奇抜な答でもなければ、決して新しい意見と云ふ程のものでもあるまい。併し私共は此の俳優ガリリツクの言葉を深く味つて見なければならぬのである。唯だ漫然として論じ、且つ説くと云ふ位のこととは、それ程に六ヶ敷ものではなく、誰にでも容易に出来ることであるかも知れぬ。併し苟くも自己の説を他人に聴かしめやう、人の肺肝を貫かねば已まぬと云ふ——換言すれば、我が語る處を充分に徹底せしめやうとす

ることになれば、どうしても充分に用意がなければならぬ、それ相當の苦心をしなければならぬと思ふ。これは決して私共の演説、講話などに限つたことではない、文章に於いても、詩歌の如きものに於いても亦同一なるものである。假令その表面に苦心の痕が見えなくとも、非常に心思を費したと云ふことが分らなくとも、斯道に経験ある人に於いては、それを充分に認めてくれる許りでなく、こゝに苦心の結果に生み出したものは、必ずそれ相當の効果を齎すべきものであることは、改めて云ふまでもないことである。

苟くも社會教育の重任に當るものだとか、或は話方の研究でもしやうと云ふものは、此間の呼吸を忘れてはならぬ。若し其の用意なくして無鐵砲にやれば、やる丈けの結果がない。何等の影響もあるべき筈がない。私は今日の時勢に適應して、辯舌道を以つて社會的

教育をしやうとするものは、こゝに深く思ひを潜めて貰ひたいと思ふのである。

二

回露に配する牧童　こゝに私共が演説、講話などをするに先立つて、苦心もし、充分なる用意をするの必要があると云ふことを以つて、唯だ突飛な事を考へるとか、徒に新奇なる説をのみ立てやうとするとか——云ふやうなことであると思ふものがあるならば、それは大なる誤解である。斷じて私共の取らぬ處である。私の云ふのはさう云ふ意味のものではないのである。

私は今一つの實例を示したい、良工苦心の痕の如何なるものであるかを具體的に説明したい。それには有名なるゾイクトルユーゴ

がウオターローの古戦場を叙した散文詩に就いて見るが最も好いと
 思ふ。ユーゴの此の作は、世界に於ける第一の傑作と云はれる丈
 けの趣味あり、情味あり、氣品あり、精彩あるものである。が、そ
 の冒頭は何であるかと云へば、あの大戦争——曠古未曾有の出來事
 を叙するに露を以つてしてをる。而して『その結末は?』と云へば、こ
 れも亦無造作に牧童を以つてしてをる。若し之れを平々凡々に考へ
 るならば、何等の奇もなければ、何の情趣もあるまい。併し其の眞
 味を充分に咀嚼するならば、この單純なる露と而して牧童とは、ど
 れ丈けに大文豪が苦心の餘になれるものであるかと云ふことも、ど
 かに能く諒解せられるであらう。

ウオターロー戦争の朝、ナポレオンが唇に起きた時には、その陣
 營に近い草の葉に露が掛つてをつた。その草葉の露を見た炯眼なる

ポナバルトは「雨が降つたのか」と問ふた。その時に侍從武官長は如何
 にも昨日降雨のあつたと云ふことを答へた。こゝに於いて其の出身
 が砲兵科であるナポレオンは「それでは泥濘の爲に大砲の轍が動けな
 くなるだらうからして、暫く進軍を見合せよ」と云ふ命令を全軍に下
 した。命令一下、かの聯合軍に對する攻撃は、この露の爲に五時間
 を猶豫せられることになつたのである。

然るにウエリントン將軍の軍はどうであるかと云へば、出來る丈
 け——一時間でも、二時間でも宜しい。佛軍の攻撃を延ばして貰ひ
 たい。一刻でも遅くあつて欲しいと思つてをる。それは友軍たる獨
 逸のブルーヘル將軍は前の戦争に際して、ナポレオンの爲に敗走し
 ウオターローから大分遠くなつてをる。成程、ブルーヘルは敗走は
 した。が、その戦闘力を失つてをるのではなかつたからして、ナポ

レオンの攻撃が一時間でも後れれば、ブルーヘルが戦場に近づいて来る。それ故にウエリントン將軍は、只管に時間の遅れるやうにと祈つてをつたのである。かくの如くにして戦は、今や酣となつて勝敗の決の定まるべき最後の五分間となつた。ナポレオン大帝が最も得意とする突撃をウエリントンの軍に加へやうとした時、その時に佛軍の側面に向つて、最も猛烈なる彈丸の雨を注ぎかけたものがある！不意の襲撃、豫期せざりし敵！これが爲に、蓋世の英雄ナポレオンも、その燃ゆるが如き胸中の經綸を施すに由なく、遂にセントヘレナの孤島に寂しい月を眺めて、敗殘の餘生を終ることになつた。ナポレオンに此の痛手を與へたものは、誰あらう？前に彼が爲に敗られた聯合軍に獨逸を代表するブルーヘルその人であることは、こゝに改めて云ふまでもあるまい。

このブルーヘルがナポレオンの爲に敗走して、再びウオタローの戦場に出やうとして、ウオタローの後方に其の先鋒隊がやつて来た。この時に今まで一筋であつた道路が二筋になつてをる。右を取べきか、或は左を行くべきかは、實に彼等の迷ふ處であつた。其處に丁度やつて来たのは草を薙る年少い牧童であつたので、先鋒隊の將校は「ウオタローにはどの道を行けば宜しいか」と問ふた。併し此の道は二筋共にウオタローに行くことが出来るものであつたが、その無心の牧童は「左に行けば好いでせう！」と如何にも無造作に答へたのである。何ぞ知らむ、この牧童の無意識に答へた一言は、聽てナポレオンの爲に永久の敗亡を語り、聯合軍の爲には絶大の勝利を豫言した聲とも見ることが出来るのであつた。それは外でもない「左に行つたら好いでせう」と云つたのが反對であ

つて、若し右に行つたならば、そこには堀割があつて、大砲を通ずることが出来ないであつた。然るに左を行けば、平坦なる道路であるが上に、佛軍の側背に出づることが出来る。この左道を獨逸軍の取ることが出来た爲に、あの勝利もあつたのである。

かう云ふやうに千古未曾有の此のウオターローの大戦争を叙するに當つて、最初に露を以つてしてをることは、如何にも不用意のやうにも見えるであらう。が、この微々たる露の爲に、ナポレオンは五時間の貴いタイムを過してをる。併しそれが爲にブルーヘルは、ウオターローの戦に加はることも出来たと考へれば、露は決して意味なきものでない。作者ユーゴーならでは、こゝに思ひ及ばないことゝ云つても宜しい。それから更に最後に牧童の語を借り來つて、如何にも無造作に結びながら、深甚の意を含ましめたなどは、實に

巧妙なるもので、到底凡手の企て及ぶ處でないのである。

敢て私は此のユーゴーの散文詩に批評を加へると云ふのではないが、若し人に聴かせやう、我が意見を有効に他に傳へやうとするものがあるならば、こゝに學ぶ處があつて貰ひたい。露！ 而して牧童！ 如何にも面白いコントラストではないか。私は話材の組立法に此のコントラストを應用することは、演説、講話を有効に聴かせる有力なる手段であると信ずるのである。

三

□眼ても亦演べよ かう云ふやうに私共は、深く辯舌道の修練に志すものである。が、不幸にして我が國には昔から組織的の辯舌の學問がなかつた。而して僅かに辯舌の一として見る可きものは、所

謂御使者の口上のみであつた。これは非常に重大な役目で、主君を代表して使用するものであるからして、第一に人格、辯舌の兩者に於いて、最も優れた武士が選ばれたものである。それ故に此の御使者の任に當るものは、非常に辯舌、態度等の點には苦心したもので、彼等の中では言語の簡單明瞭と幾度も反覆せぬこと、理路を整へて相手を成程と首肯せしむる事を御使者の口上として、最も貴ばれたものである。我が國は唯だ此の一事が古來よりの辯舌道の一風として認められ得べきもので、他には求むることが出来ない。これ我國では思想、知識のみを偏重して、口舌を輕んずるの風があつた爲であると考えるのである。

それから辯舌の目的と云ふやうなものを考へるならば、これは第二の自己を造るが爲であると思ふ。即ち他の者をして自己の如から

しめ、又他のものをして己れと同じに働かせんが爲である。かの西遊記の孫悟空が分身の法を以つて幾人も自己を造り出して、その危急の時に當つたやうに、私共も社會組織が日に進化して行くにつれて、生存競争が益々激甚になつて來るからして、幾人も自己を造つて戦はねばならぬ。適者生存と言ふことは、到底免れぬ天の理であるから自己を適者と信じ、分身して當らなければならぬ。他人を自己と同化せしめて進まなければならぬ。この爲に辯舌は、最も必要にして缺くべからざるもので、所詮は辯舌が精神傳道の最捷路であつて、最も簡便にして自由自在なものである。又此の辯舌の力は非常に有効なもので、同じ自己の思想を發表するにしても、筆は其の及ぶ處が僅少なもので、その力は既に動かされんとしてをる人を動かすに過ぎない。然るに口舌は動かされずと言ふてをるものを

も、よく動かし、瞬間に敵を變じて味方とするものであるからして筆よりはより以上に貴むべきものである。諺に「The Pen is mightier than the Sword」と言ふことがある。が、その筆よりも舌は一層有力なものである。

私共は回字會と言ふものを起して、不斷に同志と共に辯舌道の研究を致してをる。かの『組立法の注意』も、更に「回字會にて」も、俱に此の回字會に於ける研究の結果である。が、この回字とは即ち口の中に口あり、口の外に口ありとの意味で、外の口と云ふのは、素より普通の口であつて、中の口と云ふのは、即ち精神の充實せる聲を言ふのである。外の口は鼻下三寸にあつて、絶えず働いてをる。が、中の口——精神の充實せる聲は、何處から出づるものであるかと言へばこれは咽喉にもない。私の考ふる處では、唯だ眼にあると思ふ

この人の眼は辯舌とは重大なる關係を有つて、それを働かせると云ふことは、なか／＼六ヶ敷いものである。随つて其の力は又大なるものである。それ故に唯だ口で能く喋舌るものは能辯家である。が目を有力に働かせる人は雄辯家であると思ふ。口のみで言ふ人は口のみに限られ、それ以外に何等の強い印象を與へない。併し目でものを言ふ人は、その顔全體でもの言ふのである。こゝに於いて能辯は部分のみを働かせ、雄辯は全體を働かせるものであると言ひ得ると共に、その印象の逕庭に至つては、蓋し大なるものがあるのである。

今迄の日本人は目で讀み、聞かうと許り思つて、決して目で言はうとしなかつた。然るに西洋人は巧みに目でもの言はせる。支那人にも其の傾向がある。今日に於いて日本人に此の習慣を養はんとす

るには、從來の因襲を打破、開拓せねばならぬ。随つて甚だ難事であると思ふ。蓋し我が國に近く大雄辯家の現出せざる所以であらう實に卑近な例ではある。が、私共は能く外國の人が「日本の女は人形のやうだ」と批評することを聞いてをる。これは一面から見れば、目に働かぬと云ふことになる。我が國の藝者は能く正面に見て良いもの。が、これは宜しくない。如何なるものでも、正面に見て良いものはないのであるからして、かの藝者が客に正面に顔を見せることは甚だ拙なるもので、是等は日本人が目働かせることを知らぬが故であらう。然るに支那の藝者は、決して左様でない。なか／＼好く目を働かせる。決して客の正面へ出ない。必ず側に座を占め、横顔を見せて客に正面を見せるやうなことをせぬ。巧みに印象の深き視線を與へて、眼を上手に働かしてをる。かう云ふやうな次第であ

るからして、相手に深甚にして、最も強烈な印象を與ふるには如何に考へても、こゝに辯舌道にマスターしやうとする私共は、目の力に依らなければならぬ。外の口の練習にのみ走せて、内の口を閉却してをる我が國の人達は、不斷に内の口、即ち目の働き、精神の充實せる聲を出すことに心掛けねばならぬ。如上の理由に依つて、能辯家にはなか／＼天稟の英質と多くのタイムの練習を要するから困難である。が、雄辯家となるには一夜頓悟して其の道に志せば、極めて易々たるものであると思ふのである。

組立法の注意

一

◎波瀾活動の照應 如何に話は組立つべきものであるか。如何に話を發展さすべきものであるか。如何に話に興味を持たせ、波瀾を起させ、活動させて行く可きであるか。而して其の起した波瀾と波瀾、活動と活動とをどう云ふやうに結ぶべきかと云ふことは、苟くも話術を研究しやうとする私共の最も深く注意せねばならぬ處である。が、その結び加減も、唯だ單に平凡な結方では、充分に前の波瀾と照應して、こゝに効果を有たぬことになる。その結びが結びに非ずして、新らしい問題を起すのではないかと思へば、急轉直下、

矢張り結びであつたと云ふことが認められるやうになるのは、餘程の巧妙なものでなければ出来ないのである。

かの伊藤痴遊君の話の組立てに就いては、現代の話をする人の中であつて、私共の参考に最も宜しいものと思つてをる。品位もあり、興味が深く、材料も確かで、如何にも真らしい。こゝに一例として同君の『作田玄輔』の一節を抜くならば、

二

◎巧妙なる説明法 鮎留が毀れた屋臺の取片附に掛らうとすると最前から此の様子を見てをつた作田が、

『やう、これッ！』
老書生の胸倉を軽く突く、

「何をするか」

「貴様は全體何をしてをるのか」

「汝が鯨の代價を拂えんで、それが爲に此の争ひになつてをると云ふことを聞いてをるから、その不足金を拂つて遣つたのぢや」

「誰が頼んだか」

「えッ」

「いやさ、誰に頼まれて其様事をするのか。食つた鯨の代金が足りんと云ふことは、それに違ひない。併し喧嘩になつたと云ふのは更に別に理由があるんだ。原因は夫から關連して來た事には違ひない。が、その喧嘩の理由を糺さずに、理非を明かにしないで、況んや喧嘩の當時者たる吾輩に何等の協議も遂げず、對手に金を出して事を計らうと云ふ法があるか」

「貴様なか／＼訝しか理窟を云ふ奴ぢやな」

「何が訝な理窟だ。貴様の方が變なことをするぢやないか。總て人間のことば、金さへ出せば夫れで宜しいと云ふものぢやない。金を出さぬでも、却つて美しいことがある、金を出しても穢ないところがある。そこが人間社會の面白い處だ。貴様がたま／＼端金を持つてをるからと云ふて、その金さへ出せば、世の中のことば、何でも解決が出來ると思ふのは、甚だしい間違ひだぞ。馬鹿野郎が……」

變へて、
突如として老書生の横ッ面を撲り付けた。流石に老書生も顔色を

「貴様何をするかッ」

云ひながら作田の胸倉を取つた。

この「云ひながら作田の胸倉を取つた」と云ふ——その掴合ひになる迄が如何にも活躍してをる。
 執れた手を逆に押へて、引放さうとした力を借りた老書生は、太い身體を反したかと思ふと見事に作田を擲き付けた。
 作田の胸倉を取つた。執つた手が先だか、逆に捻り上げて、力を利用しやうと思ふと、もう一つ利用して、作田は擲き付けられた。
 投倒されて起上らうとした作田を、作田が逆に手を執つた。作田の方が勝つたと思ふと作田の方が投飛ばされた、作田は意外にも投倒された。老書生が勝つてをることは眼前に見える。勝つたので老書生が捕へやうとした。投倒された作田は起き上らうとした。
 上から押付けやうとするのを作田は刎返した。
 上から押付けやうとする作田は刎返した。どうなるか分らぬと

云ふやうになつてをる。さうして
 パタン／＼、塵の中を二人で轉る。これを見て見物はどつと鬨の聲を揚げた。
 「民ッ」
 「え、」
 「世の中にや面白いことがあるもんだな。親分子分で喧嘩を始めたぜ」
 「さうだなア、而て見ると親分子分ぢやなかつたんだぜ」
 「まあ、何にしても十兩錢を出して喧嘩を買ふなんてえのは、餘程喧嘩の好きな書生だぜ、どうだい、まあ年齢を老つても、なかく強いな、見ねえ、那の押付けた腕の瘤々立つて力がありさうだなくやく云ふ所は薩人だぜ」

「どうなるだらう。この喧嘩は？」

「打捨つて置け、何方か死にや落著が決んだ」

暢気なことを云つて騒いで見てをる。二人の組合は果しもなく、烈しくなつて来るばかりであつた。

日本橋の派出所から、今見廻りの巡査が一人、のそりくと河岸へ入つて来た。これは何時も朝河岸が過ぎると「跡掃除を何ふ云ふ風にしてをるか」と云ふことを見るのが職務になつてをるのであつた。その例を追ふて入つて来ると此の喧嘩の騒ぎであるからして、目に附いた以上は見通すことが出来ない。つかくと進んで来て、群衆を右左へ押分けた。見物は互に顔を見合せて、

「可いねえな、悪い所へ棒が入つたぜ。猶少し来ずに居りやア、何方か納つて落著が決いちまうんだ」

「其様事を云つたて無理だな。旦那方はお役で来るんだ」

餘計な世話焼が先に立つて「さあ退いた、退いたつ！旦那だ、旦那だ！」と押分けて通すやうにする。巡査は中へ入ると此の光景だから、思はず「こらッ、喧嘩をしちや往かぬよ、待つてッ」と云ひながら左右へ引分けやうとする。

此處が私共の最も深く注意せねばならぬ處であり。静かに味はねばならぬ處である。

三

□人物配列の手順

途端に二人は立上つて打合うとする。中へ割つて入つた巡査を——何方で揮つた拳固であつたか、巡査の額をポカンと打つた。はづみでどたんと巡査が尻餅を搦く。わツと見

物は聲を揚げた。巡査は痛いのを忘れて起上りながら、
「何をするか、本職の頭を叩くと云ふのは怪からぬ！」
大喝されて老書生も手を引いて、じつと見ると、成程、巡査の額
が赤くなつてをる。

「いや、これは御無禮した」

巡査は額を押えながら、

「御無禮したとは何んだ、人の頭を叩いて……」

「ぢやから御無禮をしたと云ふてをるのぢや」

「まア此處ぢや話も成兼ねるから交番まで同道をしなさん」

「オイ汝も一緒に来い」

「宜しい、そりや何處迄も行く」

「行かなくつて……」

これから巡査が二人を伴れて、日本橋側の派出所へやつて来る
東京一番の賑かな往來の烈しい處とて、交番の前は人山を築いて
了つた。

僅かに之れ丈けである。が、舞臺は之よりも小さい、鮎留の屋臺
を毀した、横から餘計な老書生が出て来て、金を拂つてやらうと云
ふ處から入口で、拂つて遣ると「何をするのだ」「不足金を拂つて遣つ
たのだ」「餘計なことをするな」と云つて、それが緒となつて、遂に人
立ちがした。巡査が遣つて来て、人立ちの中から交番に引張つて往
つた——と云ふに過ぎぬ。之をもう一つ樂に言へば

……二人の男が喧嘩を始めた。巡査がやつて来て、二人を交番
に連れて往つた。

と云ふ三行か、或は四行で済むことを七八十行の間に鮎留の喧嘩

を止めた。誰に頼まれて金を拂つたか——と老書生と作田とが喧嘩を始めた。その周囲に立はたかつた哥兄連の甲と乙との性格の違ひ其處に這入つて來た巡査の態度、巡査が這入つて止めやうとするのを案内となつて、哥兄の間を押分けて行く老人振つた或る爺の性格が出てをる。之で巡査が來て結びが著いたかと思ふと左様でなく、波瀾を起して——途端に二人は立上つて打合うとするのを巡査が中へ割つて入つた」となり、這入つた巡査の頭に拳固を持つて行つた。これ杯は實に納まりかけて新らしい波瀾が出來たと云ふ遣り口で、此處に巡査なるもの、一つの働きを見せて、結局はどうかと云ふと「此處では話も成兼ねるから交番まで來い」となる。結局は二人に喧嘩をさせて交番迄連れて來れば宜しい。喧嘩をさせるると云ふことは、平凡な出來事であつて、喧嘩をしたと云ふこと

は、如何に叙述を旨く遣つても、唯だ單に掴み合をしたに過ぎない其處に巡査を引張つて行つた……夫れがどう變つたらう?』とは何人も知りたく思ふ處である。こゝに於いて私共が深く注意せねばならぬことは、鮫留が毀れた屋臺の取片付に掛らうとすると、最前から此の様子を見てをつた作田が、
 「あい、これッ!」
 と呼び掛けた處が局面の轉換、夫で「あい、これッ!」と始め掛けて金を拂つたのを拂はせて置けば、その儘に濟むのである。が、
 「誰が頼んだ?」
 「えッ」
 と云ふ言葉を入れる。局面が轉換した處へ波瀾が起つて來た。局

面を轉換して、こゝに波瀾を起させると共に、その波瀾なるものを一層身に滲みさせやうと思ふて、

『……馬鹿野郎!』

と云ふ言葉と一緒に老書生の横面を撲らせた。夫れからもう波瀾の真中に飛込んで仕舞つた。飛込んだと云ふやうに波瀾が捲き返したかと云ふことを説明するのは、實に五月蠅いことである。記して其の眞を傳へるかどうかと思ふと、こゝに要領を得た。兩方共に強い、能く隙を狙ふことが出来る男だと這入つて見ると後は、

『ボタン／＼塵の中を轉げ廻る』

之れで以つて締めて仕舞ふ。轉び廻る處迄は際限がない。唯だ「轉げ廻つてをる」と云へば、讀むものも、聞くものも、その周圍の境遇

に注意が向いて来る。そこに魚河岸の哥兄を持つて來るとわい／＼周圍が騒いでをるからして、平凡化させない爲に、

「打捨つて置け、打捨つて置け! 何方か死にやア落着が決くんだ」

と云ふ一筋を挿んだことは、確かに平凡ならざる意味を含んでをると申さねばならぬのである。

四

心理作用の説明

組打は果しもなく激しくなつて來るばかりであつた。

と説明したことに依つて魚河岸の哥兄連の荒い心持と、暢氣な心持とが充分に思はれる許りでなく、そこで面白いコントラストを感じさせて、面白いことを云つて烈しい立廻りを見せてをる。之は狡

狩い遣方である。が、なか／＼巧妙なやり方でもある。
日本橋の派出所から、今見廻りの巡査が一人、のそり／＼と河岸へ入つて来た。

と云へば、直ちに聞くものは「止めに来たなア」と思ふであらう。がその注意を避けて、

之は毎も朝河岸が過ぎると「跡掃除を何ういふ風に仕てをるか」と云ふのを見るのが職務になつてをるのであつた。

と云ふやうに縁故のない人間にして、突入する處を面白く感じさせてをる。而して唯だ巡査一人では局面を轉換する爲に餘り面白くないからして、巡査と暢氣な連中とを結び付けてをる。巡査が出て来る——するとおせつかいにも、

「旦那だ、旦那だ！」

と餘計な世話焼きが先になつて巡査を通すやうにする。おせつかいに依つて魚河岸の暢氣な連中と烈しい立廻りを結び付けるやうになつて、そんな時は唯だ「コラッ」と云ふのが普通である。その暢氣な巡査と其の烈しい立廻りを極く緊密に結び付ける方法として、

「左右に引分けやうとする途端に——何方の揮つた拳固であつたか、巡査の額に當つた」

こゝで引離すことが出来ない關係が出来た。作意をもう一つ強く働かせて、額に當つた許りでなく、

はづみで向ふへドタンと巡査が尻餅を搦く——わツと見物は聲を揚げた。

と語つて、魚河岸の暢氣な哥兒連を活躍させてをる。聞くものをして、濟んだかと思はせ、又新波瀾を涌き起させて、興味と云ふも

のが此處にずつと涌き起つて来る、其處で、

『何をするかッ、本職の頭を叩くと云ふのは怪しからぬ』
扱て巡査との喧嘩かと思ふと、

『御無禮をした』

この言語が如何にも人格を現はしてをる。この人格に依つて、巡査もいふと人格に對する態度を持つたらうと云ふことは、聞くものをして想像させる。巡査は、

『まあ何しろ此處ぢや話も成兼ねるから、交番迄同道しなさい』

と云ふ後の四五行は、誰も言ひ得ることである。併し此の順序を味つて見る時には、ものには如何にして局面を展開せしむべきか、その局面を展開した丈では人の興味を絶対に極端に迄引張ると云ふことは六ヶ敷いと云ふので、展開した局面に波瀾を付ける、波瀾を

付けたならば、思ひ切り附ける筈である。が、或る程度まで附けたならば、後は想像に任せて、それを説くものは、波瀾の側面を引いて行く、而して一旦波瀾がどうなつたかと云ふ時に、その取片附けに著手して行くと云ふやうな遣方をする方が徳であると云ふことは好く分つてをる。人格なるものが言語に依つて活躍されてをる。前では金を拂はふと云ふと『誰が頼んだか』と云ふのは、喧嘩の相手が逆捻を食はせる處で、人格ではない。併し『誰に頼まれてそんなことをするか』喧嘩の當事者たる吾輩に何等の協議も遂げず事を計らふと云ふ法があるか』と云ふ。これは局面の轉換が根據ある轉換と云ふことが分るのである。

かく前の轉換に於いては、好奇心を満足させる轉換ではない。が據り處のある轉換と云ふものが此處に出來て来る。聞く人も成程と

合點が行く、他のもの、人格を活躍させてをる。「貴様なか〜訝しか理窟を云ふ奴ぢやな」——「訝しか」といふ久留米地方の方言を使つて、俺は理窟が分つてものを云ふと云ふ後を引き出させる。が、人格と後の筋を拵へる材料になつてをる、さうするとその理窟を云つた男が理窟で押し通したかと云ふとさうではない。押し通したならば、局面の轉換も、波瀾も、普通のものになつて仕舞ふ。が、その波瀾を何ふ納めるか、何う納める事が出来やうかと云ふ波瀾にするには、仕舞の所を擧げなければいかぬ……「此の馬鹿野郎が」と云つて突如老書生の横つ面を撲付けたと云ふ、こゝで局面が轉換して、波瀾となり、狂瀾怒濤となつて仕舞ふ。掴み合を長く叙してをると弛れるからして「投げた、投げ付けられやうとした奴を其の力を借りて逆に投げ付けやうとした奴を投付けた。上から押へ付けた奴を又劔

返したと云ふ事を二つ三つそこに左もあつたらうと云ふ兩方の動作を極く最少限に話して置いて、もう讀者の想像が動いて來たと思ふと「ボタン」／＼塵の中を轉がり廻ると云ふ句で結んで仕舞ふ。勝手に想像に任せて置いて、夫れから側面を叙して行く。この纒かに七八十行を能く味ふならば、如何に話の局面を展開させるか。その展開させる遣口、その後の様子と云ふものが分るであらう。

五

回局面轉換の必要 それと同時に、私共が話を組立てる材料になるのは、局面の展開や波瀾と云ふ事は、本筋の波瀾を拵へるよりも本筋以外に局面を展開させ、波瀾を拵へて、話に興味を付けて行く最少し言ひ換へるならば、本筋は面白くない話でも、本筋に挟む事

が出来来る。横筋に波瀾を起して、局面轉換を付けて行けば、人に聴かせるやうな話は樂に出来ると云ふやうな結論に到達しはせぬかと思ふ。本筋の局面を轉換させ、本筋其の物の面白い事を掴まへたり外に興味を付ける。私共が百の話を開くならば、百の話に山が皆ある。皆聞くべき話である。が、興味ある話だと云つて聞くものが少い。本筋は面白くなくても、局面が轉換しなくとも宜しいからして、本筋に關係のあるやうな事を其處に持つて来て、其處に局面を轉換させ、波瀾を起し、狂瀾怒濤を起させて、夫れを本筋に歸つて行かせる事が出来るならば、面白くない話も、猶ほ面白く聞かせる事が出来る。如何なる話も、話として使へないものはないではないか——と云ふ結論に到達しはせぬかと思ふのである。

回字會にて

—(問とあるは會員、

答とあるは著者)—

問 回答體の效果は 幼稚園の子供に對して、何分間が程度で何う云ふ言葉を以つて、何う云ふ材料を使つて話しますか。

答 幼稚園の子供に話す程度は、要するに十五分乃至二十五分です。それから言葉は獨白でなくして複白、之は加藤咄堂君の言葉に依ります。が、此方が始めから仕舞まで話さずに問答體にする分り切つた事を自分が疑つて、子供に「さう云ふ善だがなア」と云ふ考を起させる——獨白式は幼稚園の子供にはいけぬ、複白にやら

なければなりません。復白も程度で、際限がなくなる。幼稚園の程度の子供の連想作用と云ふものは、決して確實でない。夫れであるが爲に、びしやつと一つの事を考へさすと其の神経系の働きが縁故のない機能を働かせると見えて、縁もゆかりもない話を出して締る事が出来なくなる。聞き放しで聞いて宜いかと云ふとさうではない聞いた爲に却つて混雑して納まりが著かぬ、何か動物の話聞いた時、その動物園を見た時、何う云ふ人が何う云つたと云ふやうな事を連想する。木の葉が落ちて、木が裸ン坊になる「寒いでせう?」——狐も、狸も隠れる處がないから寒いでせう、先生、雷が寒いでせう雷など、云ふ事を何の縁で考へたか、雷は嫌いだ、寒いのは嫌いだと云ふやうな事から色々の事を引張り出して来る。そこで「まア夏にならなければ出て来ないのだ」と云つて片付けます。

問 その雷と云ふ——雷を狐か、或は狸と連想したものはありませぬか。

答 夫れは無論左様思つたでせう、雷は唯だ鳴るものである。が雷を動物なら動物と思つたかも知れぬ。併し私共の頭から狐や狸が出さうにもない。殊に三四ヶ月過ぎてをる時に持つて来て云はうなどは夢にも思はぬことです。序に最う一つ云つて置きます。加藤咄堂君が「通俗講話の理論及方法」と云ふ本を出されたことがある。多分何處かの教育會で二三日續きで講演された其の材料であらうと思ひます。が、この書物は——加藤君の書いた雄辯術を讀むに就いての雄辯術の心得を促して置き度いと思ふです——私の想像する處では、加藤君は演繹する事に於いて非凡の妙手腕を持つてをる。が歸納させる事はあ得意でないらしい。加藤君の書かれた雄辯術は演

釋すると云ふ上から云ふと面白い書物であります。が、歸納する時の参考としては、何等の得る所がない。例へて云つて見ますれば、加藤君の雄辯術を聞いて居ると「花が咲くぞ、花は幹の上に咲く、幹の上に出る、花が付いた、夫れ見給へ花が咲いた」夫で皆花と云ふ上面を見渡した時は、幹から起つたことは忘れて仕舞つて、段々上に行つて花なるものは「春になつて、かう云ふ具合に咲くものか、花は綺麗なものだな」と思ふです。だから加藤君の雄辯術を読んで雄辯家になり得る人は、殆んどなからうと思ふ。雄辯と云ふものはかふ云ふものである。花と云ふものは斯ふ云ふものだ。雄辯にあてがれる、花にあてがれると云ふ處が確かにある。それを讀んで私共が「さうだな、花と云ふものは根にあるんだな、來年の春を樂むのには、肥料を根に遣つて行かう」と云ふ事を思はせないやうに、華

やかにやつてのけられるやうに私には思はれるです。私共が雄辯術なり、雄辯學なりを學ぶならば、既に雄辯なるものは花でありますからして、その花を咲かせるには、何處に基があるか、小枝があるか。小枝の元に大枝が付いて、大枝の元に幹がある。幹は何處に土臺があるか、その根が一番大切だ。根の處に滋養分を灌いで遣らなければならぬ。要するに根を培つて行くと云ふならば、彼處に到達するのだと云ふ事を考へて、華やかな花は根に到達すると考へて加藤君の書物を見たならば、多少参考になるやうに思ふ。加藤君は今日まで私の云つたよりも反對の方法を採つてをられる。或は一種の咄堂論かも知れませぬ。が、加藤君の著述を見ると演繹的頭腦が特別に發達してをられるのではないかと思ふ。皆な面白い、華やかで、如何にもばアツと廣まつてをる。殊に「通俗講話の理論及方法」な

どを讀んで行くと言明がビシ／＼と擧げてある。讀んでを一つて如何にも面白い。通俗講話の方法を説明して行くのに、幹から枝を出し枝から小枝を出す。その出し方がよく分かれ、明かに認められて、斯うも分かれる、あゝも分かれる。又其の上に小枝を出す、こゝにも分かれる、あそこにもア、分かれる。段々目が廣まつて行く。私共は夫れだから加藤君の話は上ばかり見てをるとなかく華やかである。例へて云つて見ると譬喩の應用と云ふやうな時でも、譬喩の幹からそこに枝を出して、譬喩には直喩と云ふものがあり、隱喩と云ふものがあり、諷喩と云ふものがあり、活喩と云ふものがあり、長喩と云ふものがある。と云ふやうに分けて名目が出て来る。隱喩と云ふものは斯う云ふ事を云ふ。直喩と云ふものは斯う云ふもの。諷喩と云ふものは斯う云ふものであると云ふやうに、それに花が咲い

て来る、この加藤君の特色は、非常に名目が多いことである。加藤君の話は花の上に視線を向けさせるやうになつてをりますからして、それを逆に本に歸つて来て、根の方に注意をする必要がある。お互に回字會で研究する方法も、それでありたいと思ふ。分類し、演繹し、批判して行つて、而して其の花の基になるものは何處であるかと云を風に、逆に斯う研究して来る。さうして一つでも握つたならば、握つたものは放さぬやうに、直ちに役に立つやうに、研究して頂きたいのである。

問 私幼稚園の子供に經驗はありませぬ。が、小學校の初學年から上の級迄は始終取扱つてをりまして、多少の經驗も御座います。私は話方と云ふことに就きまして疑を持つて來ました。その疑と云ふのは教育學、その他を讀んで、ヘルバルト派の教育學には、あ

伽喃と云ふものを修身の代りに使つてをります。その際に使ふ方法としては、始終問答を入れまして、ちよいと子供に聞き／＼遣つてをりますやうに書いてあります。一體子供の話方と云ふものは色に分けることがあります。が、重に情的なものではないかと思ひます。情と云ふものは、分解すれば分解する程智的になつて來ますからして、興味と云ふものがなくなつて來る。其處で話と云ふものは、この實用的の話と實用でない話とあると思ひます。私共が伽喃をする場合に、直接生活上の關係に就いては、實用的のことではなくして、遠い昔伽喃とか、未來の伽喃とか、重に想像養成と云ふ風に見るのが宜しいと思ふ。問答を挿ませると面白と聞いてをるものは、智的に分解されることに依つて詰らなくなつて仕舞ひはせぬかと思ひます。が、如何で御座いませう。

答。それはありませう。併し必ず分解すれば智的になると云ふ定理の爲に、それを有らゆる場合に應用することは六ヶしいと思はれるがどうです。情的のものであるが分解すれば智的になる。これは全體に於いては、先づ間違ひのない處である。分解して智的になると云ふことも、程度問題であり、又話の性質にも依ると思ふ。

問。その分解の方法ですなア。その説明者の説明の方法と其の時の態度と其の當時の處置方に依ると思ひます。が、多くの場合に於いて、どちらも夫れを旨く情的に元に繋いで興味を落さずに遣つて行くこと云ふことは、困難になつて來るやうに思はれるです。私は修身の授業と云ふものは、何處の學校でも、随分厄介視し、もう先生は伽喃様のやうな顔をして、子供を叱り飛ばして後をどん／＼説明する。夫が解らぬと小言を言つて行く。その反動として、修身と伽

噺と云ふものを結付けて遣つてをるです。が、話と云ふものは此方が聞いて子供が答辯が出来なければ理解されてゐないかと云ふと決してさうではないと思ふです。が……？

答 夫はさうです。それから今は理解されてをるかをらぬか分らぬ。が、それが記憶に残つてをると意外の時に理解されて働くことがある。その効果は即断することは出来ぬと思ふです。ねエ。

二

回話術と其効果と 問 けれど子供の顔付などに依つて、今の話は解つて居るかわらないかと云ふことは、宜く解らぬですなア。

答 或程度までは解るけれども、絶對に解るとは云ひ兼ねると思ふです。現に大鵬の話です。が、山中樵と云ふ人が……私が静岡縣

の吉原で伽噺をしてをつた時に膝を叩いて「成程……」と云はれた。その時に感心されるやうな噺の宜い處はなかつたので、後から其の人に「何を先程は感心されたか」と云ふと「取つても付かぬことを考へ出したので……子供の時に親父から聞いた噺だらうと思ふ。親父は私の九歳の時に死んだから其の前と思ひます。が、分を知れと云ふこととでありましたな——」と云ふこととでありました。私には未だ解らぬ。九歳前の子供で分を知れと云ふことが解る筈はないがと思つて更に能く聞いて見ると「鵬と云ふ鳥が一飛び飛ぶと百里を飛ぶ。世界の果てを見やうと思つて、往けどもく往き著かずして、遂に翼の力が盡き、今や大海に墜ちやうとすると橋がある。其處に止つて憩まうと思つて止まると橋が動き出して「鬚に止まるものは誰か」と云ふから宜く見ると伊勢海老の鬚に止つてをつた。そこで鵬は「自分は

世界の果を見極めやうと思ふたが幾ら往つても行き著かぬので、疲れて止つた處だ」と云ふと伊勢海老は笑つて「俺は千里を跳ねる海老だ、世界の果を……百里で以つて何だ」と云ふ。それで鵬は上には上があると思つて歸つて仕舞つた。伊勢海老が考へて、百里と云ふは小さなからぬ里程である、夫に自分は千里である。千里ならば見究められぬことはなからうと思つて出た。が、往けども往けども際限がない。疲れ切つて其處等を見廻してをると洞窟がある。やれ嬉しやと云ふので洞窟に這入つて憩んでをると洞窟が搖ぎ出した。「断りなくして鼻の穴の中に這入る奴は誰か」「さう云ふ貴様は何だ?」「一體貴様は何だ?」「實は伊勢海老だが鵬がこれ……であつた。自分は十倍の力を以つてをるからして、俺ならば見究められぬことはあるまいと思つたが行著かない。一憩み休まうと思つて鼻の穴とは知らず這

入つたのだ」「俺は萬年の生命を保つ龜である、俺すら知らないのに千里位を跳ねる海老で何で見究められるか」と云つたかと思ふと海老が鬚の先で突いたと見えてムク／＼したかと思ふとハツハツハツクシヨンと跳ね付けた時に、海老は向ふの岩にあつたと見えて、夫に腰を打ち著けられて、海老の腰が曲つて延びなかつたと云ふ——その話だと云ふことでありました。その話を聞いたのは九歳より前で、夫より後に考へ出したのが六十二か三の時。それで先生がお話になつたのでフイと考へ出した。考へ出した時は分を知れと云ふので御座いましたなア——と云ふのは、分を知れと云つて聞いた話ではない、馬鹿々々しい大きな龜が噓をしたと云ふ面白い噓として聞いたのだらう。その噓が……親父さんの噓を子供が記憶してをつたか解つてをつたかどうかと云ふことは、お父さんに聞いて見ないと

分らぬ。が、逆も子供の頭脳に這入つてをると云ふ感じはなかつたらうと思ひます。

問 それは別の問題ですなア。分を知れと云ふ教育的訓示的のところが脳に這入つてゐるやう筈がない。

答 その癖其のものが子供に記憶されてをつたかと云ふことは、恐らくお父さんには明確ではなかつたらうと思ふ。唯だ要點はそれですなア。

問 唯だ癖を聞いてをります間に、何んとなく海老が跳ねたとか嚏をしたと云ふこと柄が面白い。その面白いと云ふこと丈は其の瞬間は解つてをる、私はそれで宜しいではないかと思ひます。

答 夫れでは其の瞬間に解つてをれば、夫で話の効果は宜しいものであらうと思ひますねエ。

問 私も左様であります。久しい間の記憶を強めやうとして問答をする必要はなからうと思ひます。もう一つ問答することに依つて連続して面白い、之から先どうなるかと云ふことを想像に描いて、その理想が破壊されてをるではないかと思ふ。問答に依つて夫が……

答 それが断定されますか——

問 多くの場合に於いて夫が届くのであります。例を出して頂きませうか……多くの場合十中八九迄はさう云ふ風で宜しいもので、私の経験では思はれますのです。が……

答 かう云ふことはないですか。問答の取扱ひ方の性質に依りはせぬか……

問 問答の出し工合に依るのですか……

答 印象を強める爲に出すのと、もう一つは注意を纏める手段として、或は其の時の統轄する方法として、問答を使ふ。ほんの手段として問答を取ると云ふこと、或意義を含ませる爲に問答を取るのと、それに依つて違ひはしないですか。

問 違ひますか。兩者共に話の目的が其の瞬間に快感を與へればそれで満足すると云ふならば、工合が悪くはないか知ら。子供に注意を集める爲にならば、もつと外に、何も問答をせずともいろくの遣方がありはしませぬかと。

答 君が避けられる問答と私の頭脳にある問答と云ふものが違ふと思ふですなア。夫は餘程ありませう。一々使ふ私の問答は、印象を強めると云ふ場合ではない。寧ろ統轄の手段として、極く一例に過ぎない。が、例へば私が話をしてゐる時に、横に美ちやんなら

美ちやんがをつて、富ちやんに話を仕掛けてをる。「ねえ、富ちやん、貴女もさう思ふでせう？」と云ふ時に、注意を此方に牽引する手段として「巾著と剪と何んですかね」針と糸と紙と持つてをる。「鉄と何ですかね」と云ふやうなことなども皆の注意を集めるものです。

問 ハハア、成程、さう云ふ方面を問答の内に入れると致しますれば……

答 私は之を問答の効用と解釋してをります。貴下のは立入つた問答でせう……

問 さうです、想像を描くのですから……

答 君のは問答をすればする程智的になる。この位の範圍ならば智的になることはない……大勢の場合の時には、餘程考へて使はねばならぬ。獨白よりも復白で問答を使ふべきもの。又用ひた方が統

轄はし易いと思つてをる。

問 大勢の會合の時は領くか、領かぬかと云ふ瞬間に話を繼がなければならぬと思ひます。云はうと思つた時に……

答 其處が曰く言ひ難い處で、一秒の何分の一、十何分の一かと云ふことは、人を掴まへるか。或は掴まへぬかと云ふ處ですなア。あの人は間伸びがする、あの人は間伸びがせぬと云ふことは、一糸の差はないですなア。

問 初めて青年會館に出て話をした時です。が、何時落さうかと待ち構へてをるのに、遅いもので、づる／＼引摺つて行つて落さなかつたことがあります……今のお話は頗る有難いお話でありました
答 ○○さんの演説は浮かぬ方ですなア。真面目になり過ぎて絶えず人に氣の緩みを持たせない、夫だから絶えず固くなつてをらぬ

ければならぬやうな氣がするのです。あれはずつと引揚げたならば離して、呼吸を出して、さうして引揚げて弛める。弛めると云ふことがなくてはいかぬ。どうも君が一生懸命である丈けに、君の話に弛めると云ふ點がないやうに思ふ。

問 どうも仕切れぬですなア。

答 止めて黙つてをる時間が統轄の上にも影響する。が、止めてをる時間の一番貴いことは、人に合點させると云ふことが一つと、新しく考へさせる。話をずつと聞いて往つてをれば考へずに往つて仕舞ふ。一寸止めた時分に成程さうだ。夫れから斯う云ふ問題にもなつて來るのだ。その人の素養の深淺に依つて、掬み出す思想の泉と云ふものを掬出す緒を與へる。休みなしに話して仕舞うと云ふと其の人が十話せば宜く解つた處で少しか解らぬ。聞く人には、その

休みですな、いきなり呼吸を引いて休む呼吸を知つてをる人が話すと十話して聞く人の思想の深淺に依つて、十二にも、十三にも、十五にも解釋させるやうになる。詰り思ひ廻らさせることが出来るですなア。

問 ××さんが話をされる間には、確かに一二三と云ふ位の間がありますなア。

答 ××さんの話工合は、××さんの獨特のものですなア。△△さんは雄辯家であります。が、「神此處に在り」と云つて口を閉ぐのです。その次の刹那に、實際此處にゐますと思つたならば、それで宜しい譯である。その人が其の時に立てば働く。その人の思想に依つて脳と云ふものは一秒か、或は一秒の何分の一の間にいる／＼のことを思廻らす。夫が非常に効果があるものです。一昨日□□が来て

「湯を飲むより呼吸を飲め」と云ふことを聞いてをる。が、呼吸を飲むと云ふことは、區切りに休むと云ふ時、呼吸を飲むと云ふ習慣を附けることは、練習中には必要なことと思ふ。さうすると休んだ時に人の顔がどう見えるか、休んだことが如何なる印象を與へたかと云ふ判断をする材料になる」と話されました。が、貴下は説教等を遣られることが多いです。が、あれは別なものでありますか。

問 あれは全く別なものですなア、全然押え付けるやうにするもので……

答 あの呼吸を知りたいものですなア。

問 ……僧侶としての私共は、少しも意識しない——展開すると云ふやうなことをやう遣らないと云ふことを今晚のお話で解りました。

問 威嚴の代表とは 一寸伺ひます。××さんで思ひ出したで
 す。が、圓右の噺の動作と言語とを一致させる場合には——動作の
 方を先きにした方が宜いと思ふです。が——例へば人なら人が這入
 つて來ると云ふ時に「人がガラ／＼と戸を明ける」斯う云ふ風に先に遣
 つて置いて、言葉を使ふと云ふのが圓右の遣方でありませう。寄席の
 時に試して見ました。その方が印象を與へるやうに思ひます。眼か
 ら這入つて耳に入ると云ふことですか。

答 それはさうかも知らぬですなア。先づ眼に訴へて耳に入れ、
 理解力を補はせると云ふことにすれば、それは一つの眞理です。そ
 れから此の動作で思ひ出しました。が、お伽噺をする人が足を動か

してはいかぬと思ふ。私は斯う云ふことを考へてをる。腰から下は
 威嚴を代表するもの、その話の力、その話の威嚴と云ふものを代表
 するものと思つてをる、腰から上は幾分崩しても宜しい。が、腰か
 ら下は崩してはならぬ。腰から下を崩した話は見つて、どうも
 いけない、威嚴がない。その話す人の心持ちを思ふよりか、話中の
 主人公、話中のものを考へる方が多い。腰から上を動かすのは、幾
 分動かしても宜しい。幾ら動かしても威嚴を損じない。話の目的と
 云ふものを損じない。これは私の實驗に依る結果で、殊に心を話す
 人は、演壇上に演臺を置くと云ふことは、その上から云つても、置
 く間敷いものだと思ひます。あれを置くと云ふと腰から下を保護さ
 れる上から威儀が著くから話し易くもあるし、話を聞いて心持ちが
 良いではないかと思ふ。これから先に試して御覽なさい。腰から上

はどんなに動かしても宜しい、腰から下を動かさなければ……。可笑しい話だが『あの話には意味があるのだな』と云ふことを感じさせるのに、強い感じがある。如何なる話をして、私は腰から下を動かしてはいかぬと思つてをる。例へばフラ／＼／＼と足から動かし、足を伸して『フラ／＼／＼』とずつと登つて往つた』と云ふと其のやうに思へる。

問 かう云ふ場合子供が唱歌を謡つて往つた』と云ふ時には、自分が二三歩を歩いて行つた方が早く感じさせることが出来ればせぬかと思ふですが。…外のものが来た』と云ふ時には、歩いて見せた方が合點が行くと思ふのですな。説明を附加へて置いて『タツ／＼／＼』と歩いて汽笛一聲新橋をと謳ひながら歩いて来ました』と云ふやうに……

答 そこが論點の分れる處ですな。私は話と云ふものに動作を附加へると云ふことは、言語の足りない時に加へることが一つ、變化を起させる爲の動作、この二つではないかと思ふです。今迄に話したのは、驅けて来た』と云ふ時にひよつと變つた動作が分り切つたことで、それ丈け云へば明白であります。

問 その上に歩いて見せる、謡つて見せると云ふことが早く其の目的を達せられればせぬかと思ふですが……

答 それは小さい問題と思ふですな。踊るとか云ふことは別であります。が、演壇上で歩く範圍のものならば、立派に形容するところが出来ると思ふ。同時に注意を牽くことが出来ると思ふ。

問 話す時に先生のやうに動作をすると云ふと話の主人公、話を思ひ浮べるよりも、演者自身を思ひ浮べると云ふことを先生が云

ひになつたやうに思ひますが……

答 それが腰から下を動かして、身體全體を動かすと云ふと話の主人公になつて仕舞う。腰から下を動かして話してをると其處に二重の人格を働かすのです。

問 話を思浮べるよりも、あの人は面白く話したと云つて話す人の方が主になつて、話す話の方が副になつて仕舞うと云ふことを先生がお云ひになつた。

答 君で云ふと「タイラリンカ、ヒラリンカ」と云ふことを遣るでせう。君が「タイラリンカ、ヒラリンカ」と子供と遣ると非常に印象が強過ぎるのです。例へば先生が「フロックコート」を着てをる。フロックコートを著てをる先生が可笑しい、腰から上を動かすならば、宜しい。が、全體を動かすと其の人を中に入れると云ふことになる。

腰から上を動かすのと下を動かすのに依つて、或は違ひはせぬかと思ふ。普通の演説であれば、絶えず演者が演者たることを失はないです。第三者の境遇を持つて來て思浮ばせると云ふことはない。自分が自分の經綸説を述べてをるから……

問 その普通の場合に於ける演説ならば足を用ひる必要がありませんか……

答 腰から下を威嚴の材料として使ふならば宜しい、が、それでない外の材料に依つて動かすと云ふことは避けたい。威嚴以外のものに使ふと可笑しいことになる。腰から下を動かさずに「サア往かうタツタツくく」と云へば、大抵は分るです。君の云はれるのは、汽笛一聲と云つて、演壇を歩かうと云ふのです。が、それを現すにはチット立つてをつても遣れると思ひます。

問 先の聴者と……演者が話中の人物になるからいけないと云ふ
ことはないでせうなア。

答 演者が話中の人物となり得ると同時に、演者が演者となり得
る傾向を持つてをれば宜しいです。

四

問 如何に手を置く 演説する時には、手をどんな處に持つて
行つたならば宜しいのですか。

答 それは其の人の癖で宜しいと思ふ。唯だ成るべく其の手のあ
る位置が特に聴者の注目を牽かない位置に置けば宜しい。ポケット
に手を差入れると云ふことはいけない。或は演壇に手を突いて遣る
とか、成るべく注意を牽かぬやうにすれば宜しい。澁澤男が卓子掛

を前に摘み寄せるとか、或は竹越氏が前にかゝむとか云ふやうに、
特別な注意を引くのは甚だ見悪い。又氣取つてをるやうにも見える。
腰に手を當てるとか云ふやうなハイカラな姿勢をすると豫期せざる
方面に注意を牽いて、話の妨げになることがあるからして、成るべ
く注意を牽かないやうな位置に手を置くならば、夫は何處に手を置
いても差支ないでせう。併し後に手を廻すと云ふことは封じて置か
ねばなりません。

問 あの態度は非常に聴衆に對して失敬を意味するものださうで
すなア。

答 併し二時間以上も話をした時は、遣つても宜しいですなア—
西洋人などは一時間位になると大抵上著の釦を外してをります。さ
うして一本を後にして釦の處に手を入れてをる。又ポケットに母指

を一本位入れてをるやうです。皆入れたら無禮なと云ふことになる演壇に立つものは、釘を掛けて上る。さうして三十分計り経つて、話が熱して来ると釘を外す、さうすれば釘が手の働きの足らぬ處を働いて呉れるのです。

問 それから云ふと手を何處に置くものかとか、置かなければならぬと云ふことは、話をするものゝ如何に依つて千變萬化し得るもので、極めて置く必要はないですなア。

答 詰り自分の手に依つて自分が云はんとする處を邪魔されるとか、又姿勢等に依つて邪魔されると云ふことがないやうに、何のこだわり事のないやうにして、人の前に出ることが出来れば宜しいです。『羽織を脱ぐ、ア、暑』と云ふ時にでも、話をする前に釘を掛けて置くと都合が宜しい、『角力を取つて暑くなつた、羽織を脱が

う、ヨシ来た』と云ふときに釘を脱せば、如何にも羽織を脱いだやうに思はれるものです。

五

回方言の取扱方は 問 お尋ね致します。が、お伽噺などの中に方言を使ふ時はどうするですか。

答 原理として、私の思ふには、成程、田舎者であらうか、熊本なら熊本、北海道なら北海道であらうかと云ふ語は、一言を附ければ宜しい。全部を方言で云ふのはいけない、例へば『訝しか理窟を云ふ奴だ』と云ふ『訝しか』と云ふ事に依つて、九州のものやと云ふことと、田舎の一種の仙骨を帯びた人間ではないかと云ふことを思はせる。最少限の方言を使ふと云ふことを限度とする。それは單に方言

許りではない、模聲でも、例へば豆腐イイ〜と云ひながら擔いで來ました。豆腐イ一の半から説明者の領分でせう、豆腐イ一と云ふと感情を引付ける、豆腐屋が來てをるなと云ふ感じを持たせたならば、夫で宜しいのであるからして、それ以上は演者に歸つて來る。演者と聽者と云ふものと密接の關係を持たねばならぬ。お伽噺を持つて來るには標準に過ぎない。演者其の者が出て來なかつたらば、目的を徹底することが出來ない。標準は目的を達し得る最少限に遣る。カア〜と云ひながら鳥が飛んで來る。その三遍後のカア〜は演者に歸らねばならぬ。何某君は模聲を極端迄も使ふ人です。が、ブ〜ブ〜ド〜ド〜と云ひながら子供が出て來ると云はねばならぬ。ブ〜ブ〜ド〜ド〜と言ひながら子供が出て來ると云はねばならぬ。

問 今の方言で思ひ出しました。が、方言は斯う云ふ風にせねばならぬと思ひます。悪い言語と云ふやうなものは、之を使はねば意味が通らぬと云ふ時でなければ、決して使ふ必要はないと思ひます。妙な言葉は子供の印象を強めますなア。さうして何處迄も覚えてをつて、宅に歸つて夫を使つて仕方がないので。それから考へますと『コン畜生』とか、『この野郎』とか、『野呂間』とか、『般若』とか云ふやうな方言のやうなものは、成るべく使はぬ方が私共の立脚地から宜しいと思ひます。

答 さうです、夫でないといふ演者に立歸り難いです。もう一つは鳴聲、長く鳴いてをると子供が可笑しくなる、それは演者が冷笑されるのですから、冷笑されてはいかぬ。事柄の發展が可笑しいのは宜しい。が、動作其のものが可笑しいのは努めて避けなければならぬ。

それで遣悪い時があつたならば、反對から説いて行く、「そんなに泣かなくても宜しい」とか、「そんなに涙を出して」と云へば、泣いてをるとか、笑つてをるとか云ふことは分る。アハハハと云ふと何んだかだらしがない。「何んだ驢馬の泣くやうな聲を出して、男がそんな聲をするものではない」と云ふやうに、反對の方から説いて行くと効果があるものです。

第五篇 参考

米國に於ける通俗講演

第一 通俗講演とは

□通俗講演の種類　こゝに米國に於ける通俗教育の一斑を申述べ
るに當りまして、その通俗教育の骨子なり、主體ともなつてをりま
する處の講演、圖書館、美術館、博物館、動物館、展覽會乃至は
共進會と云ふやうなものは——我が國などでは、是等のものが個々
別々になり、はなれ々になつてをりまして、殆んど縁故のない無

關係の姿となつてをりまする。が、米國に於いては、決して左様でない。總てが組織的であり、共通的であり、且つ脈絡を保つてをるのでありますから、その中の二三を取つて仔細に申上げるならば自ら全體が窺はれると云ふやうになつてをるのであります。

そこで私は通俗教育の手段として、最も効果の多い、随つて最も重く認められてをる處の通俗講演を主として、こゝにお話し申上げたいと思ふのであります。先づ米國に於ける通俗講演と云ふものを概括しますれば、少くとも私は、

A 組織的に行はれてをる通俗講演。

B 非組織的に行はれてをる臨時の通俗講演。

と云ふやうに、最も明確なる二種類に分けることが出来やうかと思ひます。

二

回組織的通俗講演 而して更に其の「組織的に行はれてをる通俗講演」も便宜上から、その性質に依つて二種類に分けた方が分り易いやうに思はれます。即ち其の第一種は「行政的計畫の下に行はれてをるもの」でありまして、第二種と申するのは「社會組織の狀態が行はせるもの」であります。

前者は故意に行はれるものであります。が、後者は自然に行はれてをるのであります。言葉を擡へて申上げれば、前者のものは少數の先覺者が意志の發動の結果からで、後の方は多數の凡俗輩が習慣性の善用からであると認めることが出来るだらうと思ひます。少數の先覺者と申せば、或は市の爲政者、又は大學の教授、或は社會の先

達と云ふやうな人々の考へが一つの理想をたて、それに到達すべき手段として、強ひて行つてをるものであります。又後の方は市民なり、國民なりの各々が持つてをる習慣性なり、遺傳性なり、又は境遇の働く自然の結果が吾知らず一とつの善い働さに導かれるものと云つたやうなものであります。

更に之を具體的に申上げますならば、行政的組織計畫の下に行はれてをる通俗講演は、かの紐育と桑港と此の二市に於いてのみ毎年十月一日から翌年三月一日迄を季節として、該市の學務課の統轄の下に行はれてをるのであります。それから後のも一つの「社會組織の状態が行はせるもの」の方は、一年中を通じて、毎日曜に行はれてをる教會の説教と、近年に其の運動を開始した教會の副事業であるインスチテューションナルチャーチと呼ばれてをる一種の會社的教育

事業であります。

三

回非組織的通俗講演 それから「非組織的に行はれてをる臨時の通俗講演」と云ふのは、如何なるものであるかと申しますならば、毎年十月初から翌年の三月いづばいを講演季節といたしまして、その期間内に催される各種の講演のことを云ふのであります。而して此の非組織的通俗講演をも亦二種類に分つことが出来ます。即ち其の一は非組織的講演中の組織的講演とも云ふべきものでありませう。何故に非組織的講演中の組織的講演であるかと云ふ疑問に對しては、こゝにバートン・ホルムス氏を例と致しますならば、氏は過去十數年間を米國東部の九つの市を選定して、定時、定期に巡回しては講演

をしてをるのであります。それから其の二は、非組織的講演中の非組織的講演であります。これが米國に於いて、最も多く御座いました、或は旅行者、或は新歸朝者、又は俱樂部員の實驗談と云ふやうなものでもあります。

こゝで序に米國の俱樂部組織と云ふものが如何に通俗教育に資するものであるかと云ふことを申述べておく必要があらうと思ひます。抑々米國人は、殆んど先天的にクラブ人種とでも云ふことが出来はしないかと思はれる位に俱樂部組織と云ふことに就いては熱心であり、眞面目であります。而して又これが大人許りでなく、少年でも中學校の二三年生になれば、もう各自の所屬する俱樂部を持つてをりまして、そこで樂しみ、それを旨く活用してをります。それ位でありますから、普通に如何なる人でも、二種や三種類の俱樂部に加

入してゐないものは、決してないのであります。

例へばこゝに新移民の團體が新開地に這入り込んだといたします。彼等は各自の這入る可き場所、雨露を凌ぐべき個處をこさへたか、こさへない中に、早くも俱樂部の組織に取掛つて、俱樂部やうの建物の新築を開始するのであります。而して其の俱樂部の建設に眞面目であり、この建物は大きい、美しい、心地よくこさへるのであります。

それで新開地に於ける米國移民の住居と云ふのは、極く粗末であり、汚いものでありますけれど、その俱樂部のみは實に美事なものであり、立派なものであります。彼等はこゝに皆打集つて楽しみもし喜びもいたしますのみでなく、その俱樂部を來客の接待場ともすれば、共同の研究所ともいたします。そこで自分の宅に珍らしい客で

も参りまするならば、必ず案内いたします。而してその客を俱樂部員に紹介して、俱樂部員と共に、その珍らしい人から珍らしい話を聞かうとするのであります。又新しい旅行者が来た。俱樂部員の一人がそれを耳にすれば、必ず招待して、俱樂部員全體でその珍らしい談話を聴くと云ふやうな具合に、俱樂部なるものは、常に新しい意味の知識を供給するのであります。

かう云ふやうに、如何なる俱樂部でも、一週に一度や二度位は、新しい講演に接しないと云ふことはありませぬ。これが取りも直さず、非組織的講演中の非組織的なものであります。が、その及ぼす効果と云ふものは、どれ丈け大きいかわからないのであります。この俱樂部組織などは、我が國にも真似たいものだと思ひます。是非米國に於けるが如きものが欲しい、日本人はどうも隱居的であ

ります、獨占的であります。衆と俱に樂むとか、弘く娛みを分つとか、公共的な、社會的な、公開的と云ふことが甚だ少ないやうに思はれるのであります。併し個人々々に質して見ますれば、相應に珍らしい人にも接觸してをる許りでなく、又新しい知識をも割合に吸収してゐるやうであります。けれどそれが一般的でなく、共通的で御座いませぬ。で、これ丈けはどうしても米國に於ける俱樂部組織に多く學ぶ處がなければならぬと思ふのであります。そこで以上に申述べましたことを概括しますれば、組織的講演中の組織的のものは、組織的即國家的であつて、公的とでも申しませうか。非組織的のものは、個人的即私的であると云ふことが出来ると思ひます。この二つの方法で、米國は社會的の自家發展をやつてをるのであります。

第二 移民と教育

回 組織的講演の意義　そこで先づ順序として組織的講演から説明致します。が———何故にこゝに組織的講演と云ふか、殊に行政的に行はれてをる紐育、桑港の二個所がどうしてさう云ふやうな様式に據つて、通俗教育を行ふやうになつたかと云ふことを考へて見たいのであります。

こゝに紐育と桑港と申しました。が、桑港は紐育をお手本に取つて、その事業に着手して未だ三四年にしかならぬのでありますから紐育市のものに就いて詳細に述べますれば、何が故に桑港がかう云

ふやうな組織を取らねばならなくなつたかと云ふことが分るだらうと思ひます。それでは紐育市は何時頃から其の事業を創設したかと申しますれば、今から二十餘年前のこと、即ち我が明治二十二年頃にこれを始めたのであります。その通俗教育講演は、我が帝國議會より一年を多く算へてをります。我が國民が僅かに立憲政治の恩典に浴した時に、既に米國人は通俗教育と云ふ偉大なる特典に浴してをつたのであります。

この紐育市では、抑々の初めから「I.L.D.」———法學博士の學位を有するライプチーゲル氏を主任として、副ふに講演と圖書館とを兼ねて七人の委員を専屬させてをるのであります。どうしてかう云ふやうな具合に、力を入れて行政的に、而して組織にやつてをるかと思はすれば、紐育市にはかうせねばならぬ理由があり、事情があり

目的があるのであります。米國に於ける米國々民と云ふ意義は、日本に於ける日本國民と云ふ意味とは非常に違ふ。その意義の相違する米國々民は、紐育を關門として、米國全土に弘がるやうになつてをるのであります。その關門であるが故に、紐育市は此の意義の違つた國民に對しては、他國々民の想像することの出來ぬ苦心があるのであります。弱點があるのであります。こゝに意義の違ふと云ふことを實例で述べて見ます。ならば、私共日本人は、祖先代々純粹の混り氣のない大和兒と云ふか、大八洲國民と申しませうか。生粹、生拔の人種でありますからして、特に「君も日本人か、僕も日本人だ！」と云ふのは、何となく可笑しいやうに考へられるのであります。然るに、翻つて考へて見ますれば、この日本國民の間にすらも、

猶ほ近頃は日本人と云ふ見解も、條理の上から怪しいものが出來か
 けでをるのであります。又それとは反對に、論理上の證明を得て、
 初めて日本人だと云ふやうなものも出來て來てをるのであります。
 例へば條理上から怪しまれると云ふのは、かう云ふことであります
 私の友人が布哇に家庭を持つてをる。その細君が聊か健康を害した
 と云ふので、二三人の子供を連れて、彼此一年餘も歸朝してをりま
 した。然るに其の健康も漸く恢復したことであるからして、布哇の
 方に渡航しやうと致しますと、思掛けもなく、渡航免狀の下附が六
 ケ敷い、果して何時下附してくるのか、それとも下附されないの
 かどうかさへ分らぬやうな有様である。先方からは何故に早く歸つ
 て來ぬかと催促が厳しい、そこでこちらから「渡航免狀が下らぬので
 上船することが出來ない旨を答へると、布哇の方からは「そんな莫

迦なことがあるものか。渡航免状と云ふものは、乗船する時に必要
 なものではなく、下船して布哇に上陸する時にこそ必要の生ずるも
 のである。殊に布哇では、誰知らぬものもない吾々の家族であるか
 ら、免状も何もいつたものぢやない！特に子供等の如きは、布哇
 で生れたものであるからして、立派に米國の市民權を持つてをるも
 のである。何も構ふことはない、乗船してしまへ！抑々渡航免状
 の性質から云つても、唯だ此の免状を有するものには、相當の保護
 を與へてくれるやうにと甲政府から乙政府に依頼するまでのものに
 過ぎない。それ故に免状が無いからと云ふので、乗船が出来ないな
 ど云ふことのあらう筈がない。決して構はないから乗船してしまへ、
 若し乗船した後で日本の水上警察がぐずぐず云ふならば、米國領事
 に訴へ出でよ、而して何が故に日本の官憲は米國市民に束縛を加へ

(116)

るかど質せば宜しい」と云ふやうなことがあつたのであります。
 こゝに於いて、その子供は日本人であるか、それとも米國人であ
 るか、甚だ怪しくなる、大なる疑問が生ずるのであります。この子
 供等は——意味は相違いたしますけれど、近頃世間で能くはやつて
 をる所謂「二重人格」を持つてをる。即ち彼等は日本人であると共に、
 米國人でもある。かくの如く所謂條理の上からは怪しまれるもので
 あるかと思へば、論理上から始めて肯定されて、それで日本國民た
 るものがあります。例へば朝鮮人の如き、生蕃人の如き、オロチヨ
 シの如きが左様であります。殊に生蕃人の如きになりますれば「前
 は日本人だぞ！」と云はれても、日本が何であるか、日本人がどんな
 ものかさへ知らぬ連中であります。けれど之が日本の國旗と主權の
 下に保護されてをることになりますれば、立派な日本人であると云

(117)

ふことが出来るのであります。
 かう云ふやうに、お互に日本人であるなど、云ふのは可笑しいやうであります。が、近頃は日本國民と云ふものも、少し複雑なる意味を持つやうになつて来たことは争ふべからざる事實であります。之等の新しい日本人を在來の生拔きの日本人と同等に意義あるものと仕立あげるには、特別なる社會教育機關と教育様式の必要であると云ふことは、自らにして分ることであらうと思ひます。
 そこで——日本に於いてさへ斯様であります。これが米國に於きましては、極端に激しいのであります。而して其の品種の相違も甚だしいのである。が、それと同時に品質の相違も亦甚だしいのであります。その品種の違ひ、その品質の相違した人間の大潮流は、かの大西洋を横切つて、紐育市の阜頭から亞米利加全土に非常なる勢

二

ひを以つて流れ込むのであります。即ち紐育が關門となり、關門となつて、米國全體に人間を注ぎ込むのであります。そこで紐育は、この多數の人間を一樣に、その品質と品種とは相違するとも、米國の國民として、國內に入れなければならぬ。それが紐育市に行政的に通俗教育の行はれ、且つ行はれざるを得ない所以でありまして、又それが西部亞米利加の關門となり、關門となる桑港の紐育市をお手本としなければならぬ所以であるので御座います。

回カイゼルの還算　かく申上げまするならば、亞米利加には亞米利加人がない。若し眞實に亞米利加人と云ふことが出来まするならば、今日では全く社會から驅逐された赤色印度人位なものであ

りませう。そこで國と云ふ意義を持ちますれば、米國人は無いのであります。即ち意義ある國民としての國民は、全部移民から成つた集團であつて、所謂文字のやうに合衆國であります。で、この合衆國民の成立ちは能く諸君が知られてをるやうに、大部分は英國移民であります、即ち新教徒の後で、それに佛蘭西人、西班牙人、葡萄牙人と云ふ少數を加へたものが今日の亞米利加合衆國の基礎を据えたものであります。が、その後、獨逸國運の勃興と共に、人口の激増とカイゼルの密かなる野心とは、努めて活力ある壯丁を亞米利加に送り出しました。その結果は獨逸人の廣がる處、獨逸國旗の輝く處であらうと思はれたカイゼルの目算は、がらりと外れてしまつたのであります。こゝにカイゼルは、意外なる違算を發見した。それは耳日曼民族の性格は、同化され易い民族であつたと云ふことに

流石のカイゼルも氣が附かなかつたからであります。即ち獨逸人は露西亞に入つては、容易に露西亞化され、ブラジルに行けばわけもなくブラジル化されると同様に、亞米利加に来れば亞米利加化されると云ふやうに、所在同化の著しい特長があります。そこで此の民族は米國に入ると共に、獨逸國旗の輝く處とならずに、即ち十三條旗の輝きを加へることになりました。かう云ふやうに立派な米國人となつた彼等は、又權利を主張すること新教徒と異なる處はなかつたのであります。

かう云ふやうな國民が年々五十萬程も這入込みました。が、殊に彼等は活力の強い壯年等でありましたからして、米國では出来る丈けそれを受け容れました。亞米利加は出来る丈け門戸を開放して、彼等を歓迎したのであります。このカイゼルの當外れの結果として

如何に獨逸種の廣がつたかと云ふ善い證據は、新教徒の根據地と目されてをりまする處の費府に於いてさへも、費府の地圖を披いて見ますれば、その三分の一はゼルマンタウンと鮮かに印刷されてると云ふ有様であります。これを以つてしても、猶ほ其の他は推して知るべきであらうと考へます。

そこでカイセルは自己の違算を悔悟した結果は「殖民ならば出すが、移民ならば、斷じて出さない！」と云ふことに、その方針を變更いたしました。如何なる國が自己の領域内に殖民を許す處がありませう。移民ならば喜んで引受ける。が、殖民ならば眞平御免であると云ふでありませう。そこで品種も善く、品質の悪くない日耳曼民族の米國に入ることは、已むを得ず防がなければならぬことになつた。その結果は彼のグレンシャム氏の説くが如く、良き貨幣が減ずれ

ば悪貨が増加すると申すやうに、地中海を中心とした劣等の移民、即ち伊太利人、希臘人、猶太人、アルメニヤ人及びスラブの連中と云ふやうなものが代つて入つて來たのであります。が、彼等が最近一箇年に這入込んだ丈けでも、無慮九十七萬と云ふ多數に上つてをるのであります。

かう云ふやうな具合に、かの移民の大團體が潮のやうに流れ込むにも拘らず、猶ほ三百二萬六千平方哩の廣き合衆國は、最近の調査に依るも、僅かに一哩平方に人口は三十人強にしかならぬと云ふことで、それが十年前は二十五人、三十年前は十六人、六十年前には、僅かに七人と云ふ統計でありました。今日一哩平方に三十人強と申しますけれど、北亞米利加全體から云へば、一哩平方十四人と云ふ割合にしかならぬのであります。

回 教育と國民化 今日米國に於ける一哩平方の人口を三十人強と致しましても、我が國の同平方哩は三百三十餘人と云ふのに比較しますれば、僅かに十分の一にも當らぬので御座います。猶ほ仕事は多く、人數は少ないのでありますからして、米國では澤山に入つて貰ひたい、來て貰はなければならぬ。移民が入らなければ困るのであります。而して彼等を米國化し、自ら自分を治むると云ふ堅實なる米國市民化することをしなければならぬのであります。

それであるからして、かう云ふ意味で我が國民に對する通俗教育の施設に於ける意義、或は考へにも非常に違があると云ふことを深く思はなければなりません。亞米利加は烏合の衆を基礎とした尨然

たる國家でありますからして、その國家的存在の爲と其の繼續と發展と云ふやうなものに就いての希望は、決して我が國と同一ではな

い。否な、殆んど比較にならぬものであると共に、又違つた立場に立つてをると云ふことも、充分に諒解してかゝらねばならぬのであります。

米國では在來の國民以外の人間を國民化すると同時に、堅實なる市民化すること、市民の集團として、聯邦の基礎を置くこと、その資格を作ると云ふことに就いて、通俗教育即ち國民性教育の方法には、切實なる必要と壓迫とを感じて、その不備と云ふことは、實に戦慄すべきものであり、危険なる國家の運命を醸し出すのであると云ふことを思ひ出し、又覺悟して今日に至つたものだらうと私は思ふのであります。

第三 米國の國情

不安と危険と それでなくとも、米國の國家的意義と云ふものは、今日甚だ危殆なる位置に臨んでゐると云ふことが出來やうと思ひます。米國は國として、果して緊密なる結合が御座いませうか、米國人は國民として、果して鞏固なる團結力がありませうか、何物か亞米利加合衆國の國として立つ中心點であるか、主眼であるか、精神であるかと云ふことを深く考へて見まするならば、氣の毒ながら亞米利加は、事實一個の國と云はれるであらうか、甚だ疑はしいものであります。何人も多大の疑惑を懷かざるを得ないのであります。

何人も知つてをるやうに「吾に自由を與へよ、否らずんば寧ろ死を與へよ」と絶叫した當年の希望は、十三州の民に依つて、見事に成功はせられました。が、その自由は亞米利加の中心點でありませうか。平等が合衆國民の精神で御座いませうか。彼等は確かに「米國は絶對の自由、平等、愛を三位一體の神として、新しく成出でた理想の黄金國である！」とは云ふてをります。が、近く我が國に渡來したハーバート大學名譽總長エリオット博士は、何と告白してをりますか。當年絶對の自由、絶對の平等を呼號して、その理想の如く組立てられた、その絶對の自由なるが故に、その絶對の平等なるが故に吾等國民をして甚だ不安と危険とを感ぜしめ——之れを要するに甚だ不満足なるものであつたと公言してをるでは御座いませぬか。

更にエリオット博士は、之に附加へて「自由も、平等も、制限されたるものでなければ危険である！」と云ふことを申されてをります。その制限は何人の手に依つてなされるのか、何處に其の制限の力があるか。亞米利加は事實に於いて、今日國として、その力の中心點を見出すことが出来ないのではありません。この自覺が近代亞米利加の爲政者をして、帝國主義に傾かしめ、更にルーズベルト氏をして中央集權の努力を盡さしめた所以ではありますまいか。

二

回國旗と小學生 現にかう云ふやうな處から致しまして、米國に於ける先覺者の間には、何物か國としての中心點をこゝに見出さなければならぬ。而して其の中心に向つて、誠心誠意を盡さしめねば

ならぬと云ふことを思はしめるやうになつたのであります。……かう云ふやうなことを申述べてゐましては、本論に入るに頗る時間を要することになりますからして、極く簡単に、かい摘んで一二の實例を以つてお話し申し上げたいと思ひます。

この中心として國民的精神の涵養と其の統一の爲に、朽ち果つ可き人の頭腦に案出せられ、人の手に縫合された、かの十三條の國旗をこの中心點たらしむるの餘儀なくさせられてをると云ふ有様になつて來たやうなわけであります。

先づ小學校に行つて見ますれば、その建物の前には、必ず一本の高い旗竿が建てられてあります。而してそれには日出から、日没まで、雨天ならざる限りは、必ず亞米利加の旗が掲げられるのであります。それから之を掲げる時に、或地方では生徒をして、その前に

整列せしめまして、太鼓などを敲きながら「星光燦たる十三條旗」の國歌を合唱してをる處もあります。が、多くは毎朝生徒を講堂に集めてをります。講壇の傍にある小さな旗竿に十三條旗が掲げられるやうに致してありまして、それを校長が生徒の肅然と整列した時に引き上げる。さうすると生徒は、その國旗がゆつくり掲げられ始めると「ヘール、コロンピヤ、ハツピー、ランド…」を合唱すること三度いたしまして、嚴かなる敬禮をするのであります。而してそれが終ると同時に、衆生は異口同音に「吾等、今日こゝに此の亞米利加之十三條旗に對して、絶対に服従を誓言し、若し此の旗の名譽を汚しその威力を妨ぐるが如きものあらば、吾等は死を以つてこれを守り之を防ぐべし」と云ふやうなことを唱へるのであります。その時の如きは、實に森嚴なるものであります。頗る愛國の情

緒に燃ゆるが如き調子で、校長も、職員も、この旗に面し、生徒は校長の「敬禮！」と云ふ一聲と共に、等しく手を額に取ると共に、直ちに其の手を直前に延ばし、掌を上、指先を眼の高き旗竿に向けて之に目を注いで、前に申上げた誓言を述べるのであります。が、さて此の旗中心の愛國心養成の方法は、小學校に於いて許り見ることの出来るものであるかと思ひますと、左様ではなく、幼稚園の如き迄が必ず日々一回、その登校の早かつた子供を指定して、これに所謂光榮ある米國旗を持たせ、園の中心に起立させ、保姆の合圖と共に「星光燦たる十三條旗」の國歌を唱へながら廻るることになつてをるのであります。かう云ふやうに、第二の國民——米國の繼承者たる彼等に、この旗を努めて強く、努めて重く吹込まうといたしてをるのであります。

三

回 我が國は如何 私ばかり云ふやうなことを見て、亞米利加は實に氣の毒な位置に立つてゐるものだと思ひました。獨立の當年、理想といたしました處の絶對の自由、絶對の平等は、その許す可き最大限にまで達して、州は州に、市は市に、郡は郡に、個人は個人に絶對の自由と絶對の平等とを發揮してゐる結果は、こゝに一つの膨大なる合衆民は造りあげました。けれど之が果して合衆國と云へるかどうかは、餘程疑はしいのであります。

かう云ふことを考へて見ますと、我が國は實に仕合せで、上には天日の輝くが如く、萬世一系の皇室を戴き、何等他に中心點を求むる必要を認めないのであります。が、翻つて熟考いたしますれば

吾々には果して國民として、確實なる大根底があると云ふことが云へるか。 どうでせう？ 他山の石、決して米國の事を對岸の事とのみ見てゐるわけには參らないと思ふのであります。

四

回 時勢の要求なり そこで斯様な關係から成立つた在來の移民に對しても、新しい日々に入り來る移民に對しても、一日も早く確實なる國民たらしめ、恃み甲斐ある國民たらしめ、これに依つて國家的存在と、その繼續と、その發展とを企圖しなければならぬと云ふことから致しまして、その目的を達するには、米國々民たる可き簡易平明なる知識と資格とを有せしむることを眼目として、こゝに通俗教育の方法は講究せられることになつたのであります。

第四 眼目と方法

回 思想上の設備 さて眼目はかくして定まりました。が、その方法は通俗教育と云ふことになつて來ますれば、その眼目は國民性教育、方法手段に依つてなされるかと云ふことを考へて見ますれば、一つの國民性を陶冶する鑄型はどう云ふやうに選ばねばならぬかと云ふことになりす。この鑄型の研究と云ふことになれば、その鑄型に入つて來るものは、その性質に依つて、その鍛し方に依りまして、その流し込み方にも、その仕上げやうにも、相違がなければなりません。

これを具體的に申上げれば、今日大多數を占めてをる地中海沿岸から出て來る各人種の特質と、在來の教育程度、或は其の境遇、現在の状態と云ふやうなものからきめなければならぬのであります。先づ第一に衛生と云ふ教育からかゝらなければならぬものもある何よりも初めに、適當なる國民化するには、衛生思想を吹込まなければならぬ土耳其人、猶太人、アルメニヤ人、エジプト人と云ふが如き、又自制克己と云ふやうな方面から陶冶して行かなければならぬ伊太利人、アイルランド人、ギリキ人があり、發奮活動と云ふ元氣を附けてかゝらなければならぬ西班牙人、ポルトガル人と云ふやうな、さまざまの様式が其の人種に依つて必要であります。

回 言語上の用意　これは唯だ單に教育して行く思想上の眼目であり
ります。が、かう云ふ種類許りでなく、言葉に於いても亦それ〴〵
に適應するやうに考へてやらなければなりません。即ち今日、米國
に於ける移民中、最も多數を占めてゐる伊太利語、最も勢力の多い
獨逸人は獨逸語でやるのが便宜であり、容易に風を易へ、俗を移
すことの出來悪い猶太人には、彼等が常用の猶太語を以つてしてや
ると云ふやうに、その鑄型の種類も、様式も非常に複雑なるもので
あります。容易ならざる努力を必要とすることを認められるので
あります。

三

回 紐育市の施設

そこで其の具體的説明をいたしまするに實例と

して、紐育市を取ることになりまするならば、前にも一寸申上げて置
きましたやうに、紐育市は今から二十七年前に通俗講演の設備を創
始いたしましたして、米國の關門として、遺憾なきを期してをります即
ちライプチーゲル博士は、計畫の周密と云ふこと、其の徹底を期し
て、紐育全市を五區に分けたのであります。この五區の分け方と申
しますのは、市の中心である商業區、その中心に働いてをる連中の
住居してをる地方、それから市の最近に發展の機運に向つてをる方
面、場末の二方面と云ふやうになつてをるのであります。
この五區の中六百十個の學校と公共の營造物中から百七十個所を
選んで、講演中心といたしてをるのであります。素より之は家屋と
住民との性質、人口の稠密の程度を考へて區畫いたしましたものであり
ます。その名をこゝに列挙いたしますならば、實に次のやうなもの

であります。曰く

マンハタン區………下町の中心區六六個所。

ブロンスク區………上町住居區で二五個所。

ブルークリン區………新發展區にして四六個所。

クウキン區………二九個所。

リツチモンド區………一個所。

と云ふやうな具合でありまして、最も都合よく區分致してある許りではなく、この區分法の如きにしたしましては、最も能く其の目的を達せしめることが出来まると共に、その効果を徹底せしめることに就きましては、何等の遺憾もなく、應に全米國に模範、好典型を示すものと申しても、決して差支ないと私は堅く信じてをるの御座います。

第五 講演の種目

—

回效果の徹底 この講演中心(Lecture Center)では一週間に一回やる處もあれば、又一週間に二回する處もあります。而して此の講演をする日取りなどに致しまして、甲の處は水曜日、乙の個所は金曜日と云ふやうに、必ず毎週所定の日は、どう云ふ事情がありましたも、決して動かさぬと云ふ事にしてあります。

最近の一年間に、この講演中心でどれ位の講演が開演されたかと申しますれば、その回数を申述べます前に、その問題の數丈一覽致しまして、實に一千八百二十七問題と云ふ多きに達してをる

ことを知るので御座います。その一問題が一回にして終るものもありませんれば、又三回、五回乃至八回から十二三回の繼續講演に依つて、初めて結了するものもあると云ふ具合であります。

それから一回講演で終つたものは、前に申上げた問題の中では一千一問題でありまして、その外の八百二十六問題は、繼續講演になつてをるので御座いますから、その全回数計算致しますれば、少くとも二千四五百回にも達してをりませう。その二千四五百回をなした講師の数は、と申しまするならば、これも亦少からぬものであります。シカゴ以東の各大学の教授、社會の先覺者、政治家、講演者など合せて七百十有六人と云ふ多數に依つて實行されてをるのであります。その多數の講師の中には、市の通俗講演部が直接に依頼したものと、博物館の職員、並にクーパー・ユニオンから

送られたものも加はつてをります。が、兎に角に市は之等の共同の組織と助力とに依りまして、不自由なき講師を使つてをると云ふ事は、特に私共の注意すべき處かと考へます。

それから之等の通俗講演の聴講者は無慮九十有五萬人と云ふ統計で、一回の聴講者平均(中心區も場末區も押ならして)三百七十六人となつてをります。が、實に盛んなものだと申さなければなりません。

我が國でも文部省の發起に依りまして、通俗教育の普及と云ふことが段々に奨励され、各府縣に於いても、此の意を體して、いろいろやつてをるやうであります。が、一年僅かに二回とか、或は三回とか云ふ位なもので、それも一回は縣廳所在地の男子に、一回は同じく女子に、一回は郡部に場所を選んで一般にと云ふやうなも

のが最も組織的にやつてをるもの、中の稍や見るに足るものでありまして、その他の如きは、方法と回数とに就いて何等の豫案も、計畫もなく、唯だ行當りばつたりと云ふ事實を見て、その遺口の不充分であり、随つて効果の不徹底であると云ふ事を思はざるを得ないのであります。

現に東京府や市に於いて計畫してをる通俗講演の如きに致しまして、その講師の数が一年間を通じて、僅かに五人か七人、それが國の通俗教育の前途も亦頗る覺束ないものであると泌々思つたやうなわけで御座います。何れ此の講師と云ふことに就きましては、後段に詳しくお話ししたいと考へてをります。以上の講師に依つて如何なる講演が行はれたであらう。

結局紐育

市は——紐育市を關門として入り來る千差萬別の移民に對して、國民性教育を施すに、どう云ふ種目を選んだかと調べて見ますれば、略々次のやうな事になつてをるので御座います。

- 文學……………種 二〇〇
 - 歴史……………二四一
 - 美術……………二二三
 - あらゆる社會問題……………一八七
 - 一般並に應用化學……………二九一
 - 製造工業……………三九
 - 衛生……………九二
- この外に頗る不思議にも、異様に感ぜられますものは、人文地理や、旅行談として、特に注意を加へられて、四百二十七種目の多

数が講演されてをる事實であります。是に就いては、是非とも説明してをく必要がありますから、これも亦後段に詳しく申述べたいと思ひます。

先づ之等の種目は畢竟するに一般の知識問題に涉ることが出来ると思ひます。が、之れだけではどうも漠然として要領を得悪いと思ひますので、少し説明してをきたいと考へます。この中で如何なる話材が選ばれたかと申しますれば、一回講演のものは暫く措きまして、繼續された講演の種目中から選んで見ますると、文學部では

種目	講演回数
小説の發達史	二八
詩の實生活との關係	二八

近代文學の代表者	一二
十九世紀の豫言者と其の社會的使命	六
代表的米國文藝家	六
セキスピア	六
と云ふやうなものが最も聽衆間に於ける呼物でありました。更に	
歴史部の方では	
種目	講演回数
東洋文明	八

これは最も多數の聽衆を引いてをりました。が、その原因と云ふのは、丁度當年(一九一三)は支那の革命騒ぎが頻々として亞米利加人の好奇心を馳つて、彼等の注意は帝政の破壊より共和政治の建設と云ふ事に向けられて、頗る米國上下の支那に對する同情を喚起いた

しました結果は、この種の話材には耳を傾けました。が、それと同時に、過去六七年間の排日熱と云ふものは、漸く恐日病と變つて参りました。我が國に對する一種の不安、その不安より起る刺戟と云ふやうなもの、爲に、なか／＼眞面目に研究されたやうでありました。それから東洋文明の講演以外に、唯だ單に日本と云ふものを呼物にして歴史、風俗、習慣、或は茶湯、生花等の如きまでが話材の一種目となつて——講演者も、時に依つては日本から輸入した素材の怪しい大振袖などを著込んで、演壇に立つと云ふやうなこともあつたと云ふことであります。勿論、之は非組織的講演中の講演でありまして、かう云ふやうなものが頗る多かつたのであります。

それに次いで最も人氣を集めたものは、露西亞文明でありましてこれは二人の異つた講演者に依つて、一回は六回繼續講演、一回は

五回の繼續講演を致してをる。露西亞は猶ほ彼等米國人には一種の迷宮と認められてをるのであります。

この露西亞に次では佛國革命であります。歐洲に於ける共和主義の發展——これは絶對自由を呼號する亞米利加人には、最も好かれさうな講演でありまして、八回講演でありました。それから近代歐洲の基礎が六回講演、古代都市より學ぶべき社會問題も六回講演と云ふやうなもので御座いました。

美術と云ふ方の講演に就きましたは、殊更に其の話材を擧げる必要もあるまいと考へます。併し私共の學ぶべきことは、この中で音樂に關する講演の最も多く聽衆を惹いたことでありまして、偉大な効果をも市民の趣味の上に投じたことでありました。この音樂講演の場合は——講演者が音樂家、又は作曲に就いて言葉で説明する

許りでなく、演壇の下には樂器が置かれて、その講演を證據立てる演奏が伴つてをるのでありますから、聴衆は唯だ耳に理論を聞く許りでなく、その解説を聞くに止まらず、事實に於いて成程と合點させられるやうなやり口は、非常なものであります。これなどは我が國の音樂家が國民の音樂趣味養成の上に、殊に音樂趣味の幼稚なる現在の人の手ほどきとしては、是非眞似て貰ひたい遣口であると思つたであります。

二

回 社會問題の意義　この社會問題と云ふものは調べて見ますと、なかく單純なものでなく、政治、經濟、法律、社會學、聯邦問題、市政問題、教育問題と云ふやうなものが含まれてをるのであります。

先づ教育と云ふものから調べて見ますと、如何なる點を眼目として國民性を養成しやうかと考へてをるねらい處が分明することと思ひます。それを調査いたして見ますれば、

- ◎ 獨逸並に合衆國に於ける高等教育、
- ◎ ゼルマン主義と米國が學ぶべき要點、
- ◎ 米國と獨逸教育の比較、

と云ふやうなものであります。こゝで一言だけ説明を加へて置きたいと思ひますことは、教育と云ふ問題に關しては、亞米利加は常に獨逸を標準にしてをります。それ故に大學に於ける交換教授の如きに致しまして、獨逸とは既に古くからやつてをります。先日新渡戸博士もこの事に就いてお話をされておました。が、この交換教授の如きにいたしましたしても、その實質に於いては、甚だ感服した

成績を示してゐないのでありまして、亞米利加から獨逸に行つてを
 る講師の聽講生は、僅かに二人乃至三人位に依つて埋められ、獨逸を
 から、亞米利加に来てをる教授の如きでも亦頗る之に類したものが
 あります。何事にも徹底を期する米國人、又必ずなせば効果を見ね
 ば已まない獨逸人がかう云ふやうなことに安堵し、満足してをると
 云ふことを考へれば、之は寧ろ米國から働きかけて、米國が獨逸と
 大學教授を交換してをるのは、獨逸と教育程度が同じであると云ふ
 ことを證據だてる有力なる證據としやうとするにあるらしいのであ
 ります。それが爲に話材も亦かう云ふやうな風に選ばれたのであり
 ます。

- 大學教授の必要と價值、
- 共和政體に於ける教育の機能、

- 教育の標準、
- 教育と責任の觀念、
- 休暇學校、
- 職業の人格に及ぼす成果、
- 品性陶冶と家庭生活、
- 建設的努力としての休養、
- 日耳曼主義と米國が學ぶべき要點、
- 米國と獨逸との比較、
- 男女に對する休暇、
- 學校の社會的機能、
- 市民教育、
- 盲人教育、

◎ 數學の歴史

と云ふやうなものが選まれてゐます。それから市行政問題と致しましては、

- ◎ 市の租税は如何に消費せらるゝか、
- ◎ 紐育市の交通機關、
- ◎ 煤烟問題、
- ◎ 共同生活と良水との關係、
- ◎ 火災保險の率は如何にしに安くせらるゝか、
- ◎ 犯罪者を捕へる費用と防ぐ費用、
- ◎ 公園と其の活用、
- ◎ 市民と投票權、
- ◎ 未成年者の犯罪と少年裁判所、

と云ふやうなものが選まれてゐるのであります。こゝで如何にもと合點されることは、この市政問題の材料を一見した丈けでも、如何に之が市の繼續する講演の題材としてふさはしいか、又市民としては、最も之等の問題こそ聽くべく、又知りて置くべきものであるかと云ふことを合點することが出来るのであります。かう云ふ話を聞けば、市民としては、即時に其の用をなすものであり、その恩典に浴するものであります。が、之れに反して夫れを聽きそこねることになりますれば、靚面にそれ丈け損失をしたことになるのであります。

これに就いて或る時ライブチーゲル博士が「通俗講演の効果と云ふものは、彼等が實際に要するものと實際に働かせるものとを與へることに依つて、その実績が擧がるのである」と云はれたことが御座い

ます。が、前に申述べてをいた問題の如きに就いて見ますれば、かのライブチーゲル博士の申されたやうに、彼等の日常生活の實際に効果のあるものであつて、又彼等が實際に働かせるものであると云ふことも、遺憾なく合點されるのであります。

三

回計畫の不徹底　そこで彼等は之等の講演には、努めて早く、多數で、熱心に聴いてをるのであります。然るに我が國に於ける府教育會、市教育會、又は縣郡教育會と云ふやうなものなす處を見ますれば、府の計畫した處のものも、市が計畫した處のものも、全然同一のもので、少しも兩者の間に相違する特色と云ふやうなものがありません。それから更に縣又は郡と云ふやうな立場を異にし、隨

つて其の主眼とする處も大いに相違したものでありながら、その計畫する處を見ますれば、何等の相違もなく、全く同じものであります。

こゝに特に御注意申上げて置きたいと思ふことは——その同じと云ふ意味は、善い同じものを重ねやうと云ふのではなく、無方針、不徹底に於いて同一なるものであります。それはかの講演の性質並に歸趣を調べて見まするのに、之は府に依つて計畫せなければならぬと云ふやうなものでもなければ、之は市が經營したものであるからして、かう云ふやうな話材を選んだと云ふやうなものでもないのであります。もし詳しく申上げますならば、府民に「彼等が實際に要するもの」を與へるものでもなければ、又市民に「彼等が實際に要するもの」を與へるものでもない。或は府民として聴いても好く、又

縣民として聽いても差支なく、更に府民にあらず、縣民にあらざるものとして聽いても一向妨げない。甚だ門口の廣い、締る處も、纏る處もないものを與へてをると云ふやうな事實が認められるのではないかと思はれます。これで通俗教育の効果を擧げやうとか、又其の徹底を期しやうとか云ふことは、到底思ひも掛けないことではありませぬまいか。言葉を変へて申上げますならば、結局之等は目的なき知識の散布に過ぎないと云はなければなるまいかと存じます。

四

◎進取的國民と地理發 さて最後に地理に就いて御話して置きたいと思ひます。が、この地理と申します中には、人文、地文、旅行談が多く含まれてをるのであります。その理由を申上げる前に、

その話材として選まれたものにはどう云ふやうなものがあるか、少し許り調査して見たいと思ひます。例の通り一回講演のものはさて措きまして、數回に涉つて講演されたものを見ますと、最も多いのは合衆國に關する地理談でありまして、

◎東部合衆國に關するもの、 回数 四一

◎西部合衆國に關するもの、 回数 四一

即ち八十二回と云ふ多數の講演を重ねてをるのであります。それから、

◎英領北米に對して、 回数 八

◎中央亞米利加に關して、 回数 一一

◎西印度諸島に就いて、 回数 一四

こゝで注意せなければならぬことは——この中で地積の狭い割合

に比較的(ひかくてき)に多くの講演(こうげん)が重ねられてをると思(おも)はれるものは、中央亞(ちゆうおうあ)米(まい)利(り)加(か)に關(かん)するものであります。之(これ)は改(あらた)めて云(い)ふまでもなく、かのパナマ運河(ぱなまうんが)問題(もんだい)を中心(ちゆうしん)として、殊(こと)に最近(さいきん)の二三年間(にさんねんかん)と云(い)ふものは、米(まい)國(こく)人の熱心(ねっしん)なる聴講(ていこう)趣味(しゆみ)をそり立てたからであります。以上(いじやう)は北部亞(ほくぶあ)米(まい)利(り)加(か)に關(かん)するもの許(ば)りでありました。が——南亞(なんあ)米(まい)利(り)加(か)に對(たい)しては、繼續(けいぞく)講演(こうげん)として二回(にかい)、その一回(いっかい)は八回(はちかい)に涉(せつ)り、他の一回(いっかい)も八回(はちかい)と云(い)ふ二種(にしゆ)が行(おこな)はれてをるのであります。その外(ほか)に十回(じゅうかい)の單獨(たんとどく)講演(こうげん)が行(おこな)はれてをりますから、回数(かいすう)から云(い)へば、合(あ)せて廿(にじゅう)四回(じゅうよっかい)になつてをるのであります。これは中央亞(ちゆうおうあ)米(まい)利(り)加(か)の問題(もんだい)が、米(まい)國(こく)人の帝國主義(ていこくしゆぎ)の傾向(けいこう)を満足(まんぞく)させる材料(ざいりやう)であります。故(ゆゑ)に、その少(すく)からぬ興味(くわんみ)を喚起(くわんき)されたと同様(どうやう)に、彼等(かれら)が呼號(こほごう)する「米(まい)國(こく)人を以(もつ)て米(まい)土(ど)を治(ち)めしめよ」と云(い)ふ多年(たねん)の希望(きぼう)は、南米(なんまい)に對(たい)する彼等(かれら)の注意(ちゆうい)

を年々(ねんねん)に深(ふか)からしめて行く、彼等(かれら)の注意(ちゆうい)が深(ふか)くなればなる丈(だけ)、彼等(かれら)の慾望(よくぼう)は、益々(ますます)強烈(きやうりやう)になつて行くのであります。現(げん)に去年(こぞ)パルトン・ホルムス氏(しん・ほるむす)が選定(せんてい)した旅行談(りょこうだん)の天地(てんち)は、この南米(なんまい)の周遊(しゆいう)でありました。が、之(これ)に對(たい)する米(まい)國(こく)人の熱心(ねっしん)なる聴衆(ていしゆ)は、開演(かいえん)毎(ごと)に會場(かいじやう)に溢(あふ)るゝと云(い)ふやうな盛況(せいけい)を呈(てい)したと云(い)ふことであります。之(これ)は同氏(どうし)自ら認(みと)める處(ところ)に依(よ)りましても、紐育市(ニウヨクシ)では一夜(いちや)に二千五百(にせんごひゃく)弗(ふ)の聴講料(ていこうりやう)をあげたと云(い)ふことを以(もつ)つてしても、如何(いか)に米(まい)國(こく)人の南米(なんまい)に對(たい)する注意(ちゆうい)が厚(あつ)いかと云(い)ふことが了解(れいかい)せられることだと思(おも)ひます。隨(したが)つて其(その)の方面(ほうめん)の話(わたり)を聴(き)くことを求めることに、如何(いか)に熱心(ねっしん)なるかも亦(また)能(よ)く分(わか)るので御座(ござ)います。それから歐洲(おしやう)に關(かん)係(けい)したものは——單獨(たんとどく)講演(こうげん)の四十回(しじゅうかい)、亞細亞(あしや)に關(かん)係(けい)して六十一回(ろくじゅういちかい)であります。が——この亞細亞(あしや)に關(かん)した六十一回(ろくじゅういちかい)

中には、我が日本に關しての問題が十二回を含んでをるのであります。殊に日本に關しての講演者としては、現にシカゴ大學に教授をしてをるドクトル家永豊吉君の如きも、その一人となつてをるのであります。

亞弗利加に關しては二十八回、濠洲に對しては二十六回と云ふやうな具合に、地理並に旅行談に關することが殊に甚だ多いのであります。之はどうか云ふわけかと考へて見ますと、自體亞米利加の人間と云ふものは、移民に依つて成立した國民でありますだけに、その遺傳的性質の中には、不斷に新天地に新運命を開拓しやうと云ふ傾向があります。而して彼等は絶えず此の新天地を求めてゐまして、好き新天地を求め得たものは、必ず其處に發展してをると申すやうな具合であります。この點から云へば、合衆國の中にすら、大きく

申せば今日猶ほ人跡未到の地があると云つても宜しい、所謂文明の民の足跡の未だ印せられざる地が少くない、拓かれない土地、掘り出されぬ寶と云ふやうなものが到る處にあるのであります。曩に申述べたやうに一哩平方に僅かに三十人強それも東部亞米利加地方の最も密集した部分をもしならしてのこと、場所を區切つて云ふならば、合衆國の中で、その中部から西の方の如き地方は、殆んど未だ棄てられてあると云ふても差支へない個所さへ多いのであります。そんな場所には一哩平方に一人どころでなく、百哩平方二百哩平方にすら一人もゐないと云ふやうな處さへ少くないのであります。現に私の経験した處から申上げましても、カルホルニヤからサンタフキ線を取つて東に向つて進みますのに、桑港から八九時間の間と云ふものは、田園も見ますれば、その間に住居する人間

をも目にいたします。が、それから後の二日間許りと申すものは、全く茫漠たる荒野原を汽車は駛走する許りでありまして、殆んど生物として、鳥の姿すらも認めることが出来ないと思はれる位な處が御座います。

かう云ふやうな場所が開拓されて、立派な村落となり、都市をなすのは幾年、幾十年の後だか存じませぬ。が、之等の土地の如何なる富を有し、如何なる方法に依つて、その富を掘り出すことが出来るかと云ふやうなことは、常に亞米利加人の頭から失せないことであります。

そこで米國人は地理談に對して、特別なる注意を拂ふやうになるのでありまして、それは第一には彼等が生存の爲に、次いで彼等が活動の爲に、而して彼等が最後の成功と云ふことを期せんが爲には

如何なる天地が彼等を待つてをると云ふことを考へて、不斷に彼等は地理並に旅行談に非常なる興味を感じ、最も眞面目に傾聴するやうになるのであります。この米國人が地理及び旅行談に對して、異常なる興味を以つて、深甚なる注意を拂つてをると云ふことは、私共新進帝國の日本人として、決して輕々に觀過することの出来ない問題であらう考へるのであります。

第六 講演の實際

○會場の問題 以上に申述べました處で、少くとも諸君は、どう云ふ話をするか、その話材は何故に左様なものが選まれるか、さう

云ふ話に依つて、どう云ふ具合に導かれるものであるかと云ふことに就ては、お分りになつたことと思ひます。そこで今度は、實際問題に立ち入りまして、如何なる會場でこれがなされてをるか、どう云ふやうな時間に之れが行はれてをるか、如何なる模様でやられてをるか、而してそれがどう云ふ具合に働くかと云ふやうなことに就いて、お話することに致しませう。

先づ第一は會場の問題で御座います。が、屢次申述べて置きましたやうに、會場の大部分は學校の講堂であります。この學校と申しますのは大多數小學校でありまして、小學校の講堂が通俗講演の會場として活用されをります。それに次いで中學校の講堂が使用されてをります。が、その外は各種の會館だとか、或は俱樂部の大廣間だとか云ふやうなものが活用されてをります。米國では決して我が

國に於けるが如く、大多數の民衆を集める時には、寄席、或は劇場を使用するやうなことはありません。も一つ進んで申しまするならば、さう云ふものを使ふ必要がない迄に、他に最も完備したものがあるので、之などは大に私共の羨ましく思ふ處で御座います。實は此の會場と云ふことに就きまして、私は兼て實驗もし、考へてをることでも御座います。が、如何なる講演の性質でありましたも、それから講演者が如何なる立場を有つてをまして、その聴講者が其の言に聴き、その人に聴いてをる間でも、猶ほ其の場所に聴かされてをると云ふことを忘れてはならぬのであります。結局は講演する人も、講演する事柄も、その場所の影響を受けずにはをられないと云ふことで御座います。これは聊か雄辯術の講義に立入るやうであります。が、話すことを話しさへすれば、人が聴くと思ふ

のは大間違ひでありまして、話すことを聴かせるやうにして話さなければ、決して話した目的を徹底させることは出来ないものだと言ふ原理を説明するものでありまして、聴かせる心構へと云ふものゝ働

きは、是非必要なるもので御座いませう。
で……その目的に随つて、場所を選むと云ふことがなければならぬもので、私共の屢次実験する處に依りましても、之を最も鋭敏に認められると思ひますのは、かの小學校の生徒でありまして、學校の講堂で話した時と、劇場で話した時と、その成績に徴しましても、これを説明することが出来るのであります。その成績の相違の著しいことは、まア觀面とでも申しませう。私共が劇場で話して表に出ますと、子供は皆私共の周圍に集つて、指しながらこの人だよ、この人が今話したのだよ」とか、或は「あの人の、あの人の

劇
場
で
話
す
の
場
合
は
……

ま。あの人が話したんだよ」とか囁き交すのであります。が、之に反して學校の講堂で話して表に出ますと彼等は囁くより先づ前に「その日の講師であつた人と認めると同時に、必ず脱帽して敬禮を致します。遠くゐるものでも、近くにゐるものでも、私共を認めたり限りのものは、一々丁寧に辭儀をするのであります。前には「あの人」扱ひにしたものが後には「敬意を拂はれる人」となると云ふやうにこの二つの結果に見ましても、如何に場所の感化は恐ろしいものであるかと云ふことが了解されることと思ひます。

私ばかり云ふ實際を能く存じてをりまするので、或時には自分の方から其の校長に依頼して「これは劇場ではあるけれど、多數のもの集合するにふさはしい場所が學校にないので、こゝを講堂の代りに使用する。そこで皆さんはこゝを講堂と心得て、慎んでお話を

聞きなさい」と云ふやうな注意と特別なる刺戟とを與へて貰ふことにいたしましてをりますけれども、その實驗は同じことでありませぬ。即ち彼等は人に聴き、事に聴き、猶ほ場所聴かされてをるのであります。之は大人でありまして、子供でありましても、全然同様であります。子供は其の影響を靦面に表し、大人は之に時間を與へてをると云ふ位なものに過ぎないので御座います。

そこで話は前に戻りまして、米國では會場は小學校であると申上げてをきました。が、その小學校の講堂と申しますのは、大きいのにありますれば二千人を容れることが出來ますし、小さくとも五六百の座席は優にあるので御座います。で、先づ之を具體的に申しますれば、講堂の構へ方は、我が國の講堂と云ふものとは聊か趣を異にしてをります。が、一口に云へば、先づ有樂座式とでも申

しませうか。も一つ進んで申せば、劇場式でありまして、座席は尻上りに自ら高くなつてをります。勿論、座席は一人脚の椅子を準備してあるのであります。而して正面の演壇は舞臺式に構へられて、その廣い舞臺上即ち講堂には、左右に出入口があります。その正面の處は大抵壁でありまして、その壁は多く幻燈の映寫されるやうになつてをります。が、處に依りましては、この壁に梓裝飾的を付けて、一には講壇の裝飾となり、一には幻燈映畫の枠となると云ふやうな具合になつてをるので御座います。が、中には此の壁が、例へば書物を開いて立てたやうに、左右の各頁に映畫することが出来るやうになつてをるものもあります。随つて演壇から聴衆席を見ますれば、大概は階上正面の位置に、一段低く出張つた一區劃が取構へられてをります。が、之れが例の幻燈機械の据え附けられる位置で

ありまして、殆んど總ての構堂には、必ず此の設備があると申しても差支はないと云ふ位で御座います。

そこで其の出張つた處にこさへられたものが二つありまして、それから幻燈は映寫されることになつてゐるので御座います。が、こゝで幻燈と申せば、如何にも可笑しく聞へるやうであります。何とな

く時代遅れのやうにも思はれるし、又ヤンキーの米國人が今頃に幻燈を使用するなどは、實に誰にも不思議のやうに考へられることで御座います。左様、我が國では幻燈と申せば、如何にも時代遅れのやうに見えます。が、米國は全くこれと反對でありまして、米國に於ける幻燈活用と云ふことは、非常に進んでゐるのであります。然り、而して米國に於ける講演の會場と云ふものは、かう云ふやうな風に造られてゐるのが一般で御座います。私共の非常に學ぶべ

きものが少くないと考へます。

二

回時間規定 その會場と云ふものに次いで、時間の規定であります。この時間と云ふことに就いては、講演季節乃ち十月から始まつて翌年三月に至る六箇月に渉る間は、午後七時半開場、八時十分開演と極つてをるのであります。この規定は、決して紐育市の通俗講演に於いて左様である許りでなく、あらゆる處のあらゆる公開講演は、その場所と其の性質の如何に拘らず、必ず同一様であり同一徹であります。そこで今夜何處そこに講演があると云へば、もう時間表がなくとも分つてをる。紐育で午後七時半開場——八時十分開演であるやうに、セントルイスでも同様であり、桑港でも同

じことであり、シカゴも同様である。否な、米國中を通じて一定してをるのであるからして、特に「今夜の講演は何時からでせう？」など云ふ駄問の必要がないのであります。

かう云ふやうに全國各地を通じて、その時間を一定することが出来、さうしたと云ふ原因は、取りも直さず米國の社會組織の反映で御座いました、彼等の夕飯は六時から八時迄と云ふ習慣になつてをりまするので、その最も遅く済すものでも、猶ほ晚餐を取つて、直ちに馳付けても間に合ふ、早く済したものは、開演までに三十分の餘裕があります。この三十分乃至四十分の餘裕は、彼等に電車なり、自働車なりで、優に講演會場に駆付けさせる時間を與へ、餘裕を與へるのであります、之れなどは實に羨ましいこと、申さなければなりません。

私の米國滞在中は、始めて各方面に行はれる各種の講演に參聽いたしました。が、私は七時半開場と云ふので、七時頃から出掛けて見ました。處が殆んど七時半から行つて開演を待つてをるやうなものもなければ、七時半から四五分間も前から氣長に待つてをると云ふやうなボンヤリしたものもありません。左様な氣長連は全く見當らないのであります。私の實見した處では、餘程早いもので、先づ七時五十分頃から始めまして、八時十分位の間までになれば、一齊に會場は埋められるやうであります。而して八時十五分になりますれば、その會衆の多寡に拘らず、入口の戸は嚴重に閉鎖されるのであります。

私が或る時「テキサスと其の將來」と云ふ講演を聴かうと思ひまして、或會場に出懸けました。處が七時半に入りますと、今丁度門を

開いた許りと云ふ時でありましたから、會場でボンヤリ待つてゐるのも、何だか氣が利かなく思ひましたので、暫くは腰掛けてもゐました。が、餘り莫迦莫迦しいので、一周その附近を散歩して見ようと考へまして、その會場から三四丁もぶらついて、強いて時間を潰して八時十二三分と云ふ時に歸つて見ますれば、最早會場の戸が締つてをる。不思議だと時計を出して見れば、八時十五分を過ぐるのと僅かに一分！唯だ單に一分でした。而して會場の扉は今べめられたと云ふ許りの時でありましたから、どうにかして入りたと思ひました。が、なか／＼開くものでない。然るに其の時せい／＼驅付けて來た二人の青年がありました。彼等は息せき切つて、殆んど夢中に會場入口の石段を馳上りました。が、嚴然と戸の閉されてをるのに氣が付いて「あゝしまつた！」と叫んで、それから窓を押し、隙

隙を窺ひ、裏口に廻つて、何處からが入らうと努めました。併し遂に入ることの出來ないことを知ると共に、その友を顧みて、如何にも落膽ひたと云ふ調子で「あゝ惜しいことをした。どうと一回聽き損ねてしまつた！」と云ひながら、猶ほ願望低徊と云ふやうに、残り惜し氣に歸つて行きます。私も亦如何にも氣の毒に思ひまして、その青年達に「我輩も此の問題に頗る興味を有つてをるので、早く來たが少し散歩してをつた爲に、遂に時間に遅れて今引返す處だ。君達も此の話に興味を有つてゐられるのか」と聞くと、その男の曰く「自分等二人は來月から一つテキサスに行つて見ようと計畫してをるものです。それで此の講演は、自分達に取つて、實に好い參考材料で、行く決心と準備とに就いても、少なからぬ利益を與へられつゝあつたので、もう今夜一回も聽けば、その結果がつく處でありました。が

實に残念なことで御座いました」と、悄然として歸つて行つたのであります。

これなどは、米國人が如何に時間を嚴守するかと云ふことを知る實例である許りでなく、前回に申述べてをききました處の地理及び旅行談と云ふやうなものが何が故に多數に聞かれるかと云ふことに就いて、好個の參考材料になることであらうと思ふので御座います。それから戸が閉されると同時に、講師は直ちに講壇に上りまして一時間乃至一時間半は、その講演に費すのであります。が、講演が終つた後に、時としては二十分位も講師と聴衆との間に、又聴衆と聴衆との間に、自由に質疑問答、並に討論を行はせることもあります。併し之は彼等の隨意でありますから、歸りたいものは歸り、聞きたい人は残ると云ふことになつてゐます。が、その時でも彼等は

飽くまで熱心であり、眞面目であるには感心いたしました。で、会場も開いて約二時間、長くて二時間半と云ふものが講演の爲に講堂を使用する全時間となつてをるのであります。それが爲に聴講者も時間に損失がなく、講演者にも亦無駄な時間を潰す必要がないので御座います。かう云ふやうに時間が一定してをるが爲に、彼等は時間を善く豫知することが出来ます故に、甚だ尾籠なる話ではありますけれど、我が國に於けるが如く、講演中に用を足しに出ると云ふやうな不體裁なことは決してないのであります。彼等は時間を豫知してをるので、会場に入る前に用を足してをくとか、或は歸つて後に用を足すとか云ふやうに致してをりますから、便所に立つ爲に座席を動くと云ふやうなものはなく、自らにして秩序的に整然と行くのであります。又その講堂を掃除するものから申しまし

ても、時間が来れば開閉する。豫定の時間に之れを開け、豫定の時間に之れを閉すことが出来るのでありますからして、我が國に於けるが如き会場開閉の面倒もなければ、時間外に出入するものもありませぬ。これは講演者から云つても、更に聴講者から申しましたも、聴く可く、又聴かすべき設備の中の最も主要なる意味を働くものでありますして、講演の徹底と云ふことから云つても亦少なからざる効果のあるもので御座います。

この時間と云ふ點に就きまして、殊に私が、今日迄に各地の通俗講演にお招きを受けまして、出る度毎に切實に痛痒を感じてをるの御座います。が、若し此の時間の嚴守される會合でありますならば、東京と横浜、京都と大阪と云ふやうな離れた都市の兩地に涉つて、一日三四回の講演をなすことは、左程に困難なことではない

のであります。さう云ふことになりますれば、早い話が講師の方から申しましても、二日或は三日の滞在に依つていなければ片付けることの出来ない講演も、僅かに一日にして之れを終了することが出来る許りでなく、その結果は第一に滞在費の節約ともなりますので随つて講演計畫者の側から云へば、こゝに經費の軽減ともなり、今まで一度催すことが僅かに出来た處でさへも、猶ほ其の同一經費を以つて、二度或は三度も催すことが出来ると云ふやうな結果になつて参ります。而して會合も樂になつて來ますし、通俗講演の回数も多くなつて來ると云ふことになります。その効果も著しく擧ることになり、その目的も亦徹底することになります。一舉兩得とは能く世間で云ふことであります。が、これなどは其の得る處のものが必ずしも兩得に止まらないかと思ふので御座います。

三
 回會場の模様
 そこで講演會はどう云ふやうな具合に開かれて、
 どう云ふ風に閉ぢられるかと申すことは、かの時間の説明中に申述
 べてをきましたから、既に大體はそれで分りなつたことと思ひ
 ます。が、もう少し申添へてをきたいと思ふことがあります。先
 づ諸君と共に、私も聴講者となつて、講演中心として選定された校
 舎の階段に立つたと考へませう。この通俗講演の行はれます前ま
 でと申すものは、世の中の人達は、皆學校を目して怠けた校舎と云
 つてをりました。忙しい町の真中なる高價の建築資金を投じて構へ
 られたる宏壯なる建物も、晝間僅かに七八時間使用せらるゝのみで
 その後は全く閉鎖されて、その前を通る市民をして、誠に不經濟な

る營造物であると云ふことを思はしめたものでありました。が、今
 仰いでその窓を見ますれば、何れの窓からも生々した燈火の輝きが
 道路にまで影を落してをる。戸を押して中に入つて行きますれば、
 會衆は半座席を埋めてをる。而して華かな二個のアーケ燈が講壇の
 左右を照してをる。會衆の面はその上に投げられた光線と共に、如
 何にも晴れやかに見える。かう云ふやうにして緩々と座席は埋めら
 れて行く。この光景は先づ會場の戸を排して入る私に落ち著きと満
 足を與へたので御座いました。
 ふと見ると入口の右手には一臺の小卓が置かれてある。而して其
 の上には、今夜の講演の番組と思はれる印刷物が載せられてある。
 聴衆は會場に入る時、順次にその一枚宛を取つて行く。私も亦それ
 を取つて適當なる座席を占めた後に、徐にその印刷物を見ますれ

ば、それが数回の繼續講演であれば、その講演の問題とこれが細目と講師の名前と区分せられた細目の講演せられた箇條とが印刷されて、猶ほその上にかう云ふことが必ず印刷されてゐます。それは「講師は聴衆者の眞面目なる質疑を歓迎す」と云ふこと。この講演の問題に就いて、猶ほ一步進んで調べたいと云ふやうな考へを持つてゐる人、或は更に詳しく知りたいと望む人々には、これごとくとこれごとく云ふ書物が宜しいとその著述者、書目、並に冊數と云ふやうなもの印刷してある許りでなく、之等の書籍は何處その図書館に行けば見られると記されて、その講演中心から最も近い図書館が親切に指示されてゐるのでありますからして、こゝで講演は図書館の案内であり、図書館は講演の助力者であると云ふやうに、如何にも兩相待つて組織的に働いてゐるので御座いませぬか。

そこで其の指示されてゐる図書館に行つて見ますれば、講演中心で指定された書物は必ず書架に一束、又は別に一個の特別な書架の上に取り揃へられてある許りでなく、こゝにも亦この書籍に關しての講演は、何町の何と云ふ處に、何月何日の何曜日に行はれてゐると云ふことが記されてある。で、これが如何によく活用されてゐるか、と云ふことは、図書館員の年報の上に報告される處に見ましても、誠に驚くべき成績を示してゐるので御座います。この點に就いて各図書館員、異口同音に「講演時には、その講演に關する書籍が他のいろいろの書籍よりも最も多く貸出される」と云ふ事實を發表してゐるのであります。が、これで見ましても、相當の組織的動作が如何に必要であり、且つ有効であるかと云ふことが能く分ること御座いませう。

さて今、先づその印刷物を手にして座席に著き、會衆はどう云ふ種類のものであるかと思ひ渡しますれば、こゝに著しく我が國の通俗教育會に於ける實際と違ふことは、その會衆の三分の二が婦人であることと云ふことでもあります。而して其の婦人は、既に家庭を持つて永い経験を重ねた年長婦人の多いことでもあります。

それと同時に男子の聴講者も亦多くは三四十歳以上の現に社會に最も活動しつゝあるものゝ多いことで御座いました、ざつと見渡ししました處丈けでは、男女を通じての平均年齢を考へて見ますと、三十五乃至四十五と云ふ見當であらうと私には認められたのであります。即ち最も眞面目に實際社會と戦ひつゝある年齢であることと御座います。これで見ましても、私は繰返して申し上げます。が、ライプチーゲル博士の「通俗講演は彼等が實際に要するものと、實際

に働かせるものを與へなければならぬ」と云はれてゐることが如何にも事實であると認められることとあります。かの文學博士吉田熊次氏の如きは、殆んど自己の無識を標榜して、文部省に依つて計畫されたる通俗教育に關する施設の講習會の席上に於いて「通俗教育の方法としては、講演は何等の價值も、効果もあるものでない、若し之に價值又は効果を認めることありとするならば、それは學者が教育あるものに對して話される極く僅少なる場合である」と云ふやうなことを申してをります。が、吉田博士の如きは、講演の如何なるものであるか、又講演を如何にして與ふるものであるか、更に講演を如何に受けるかと云ふことに就いて、全く知識なきものである。恐らくは吉田博士の如きは、私が前に申述べたやうに、目的なき知識の散布に類する通俗講演の一二を見て、之を講演の總てであるかの

うに誤解した結果であらうと思ふのであります。彼等が實際に要するものを與へ、彼等が實際に働かせるものを與へたならば、誰か之を取つて以つて自家存在の料としないものがありませう。若し彼等の要するものが精神的のものであつて、彼等の働かせることが精神的方面であつたならば、その及ぼす處は精神的のものであります。誰か之れを一時的の印象と云ふことが出来ませう。一時的に認められるものも、如何なる天眼通か之れを一時的の印象と斷言し得るものが御座いませう。話は飛んだ横道にそれしました。が、かう云ふやうな不心得の無知識な連中がある爲に、どの位我が社會の進運を阻害するか分りませぬ。殊に應に覺醒しかけて、その曙光を認めやうとしてをる我が通俗教育の最も簡便にして、最も効果ある此の講演作業を決して邪魔してはならぬ、吉田博

士の誤つた説に迷はされるやうなことがあつてはなりません。こゝに私は切に心ある諸君に對して、この事を深く注意してをきたいと思ふので御座います。

四

回熱心なる聴衆 講演の模様を観察する爲に會場に入つた私は、恰好の位置に腰掛けて、開演時間を待つてをりますると一方の園を排して、其の日の講師が出て參りました。それが至つて簡單なものでありまして、到底我が國などには見ることの出来ぬ位であります。が、併し之が繼續講演であれば、最初の會合の際に講演會の幹事、又は司會者が講師に就いての來歴、地位、身分等を述べて、講衆に引合せるのであります。が、もう三回、四回となりませすれば、時

間が来れば講師が出て、直ちに講演に取り掛ると云ふやうな具合で
ありまして、かう云ふやうにして一回の講演は一時間か、或は一時
間半位を以つて終るので御座います。

かう云ふやうにして、その講演の終りまする時には、講師が「これ
で今日の講演は終りと致します」と聴衆に告げる許りで御座います。
じたい出入に下足をつけるとか、履物を區別するとか云ふやうな必
要のない會衆丈けに、その儘に後方より順次に片付きまして、もの
の十分もたぬ中に、會場はから空きになるので御座います。その
簡單なる事に就いて、餘りに無造作過ぎるではないかと思はれまし
たのは、あの交換教授として渡米された新渡戸博士がコロンビヤ大
學に於ける講演の實際でありました。私は我が國に於ける講師に對
する接待振り、取扱方に慣れておまするので、コロンビヤ大學に

於ける新渡戸博士の接待振は、定めて仰山なものであらうと思ふて
ゐたので御座います。が、尤も私の傍聴に参りましたのは、その第
二回か、第三回目でありましたので、博士は定刻の時間が来ると共
に、一方のドアを排して来られました、その傍の椅子に外套を掛
け、講演壇に立つと共に、早くも本論に入るのでありました。

これなどは私共の大に學ぶべき事であらうと考へます。由來我
が國では一體に講師の接待と云ふことに對して、甚だしき手数をか
け過ぎておまするし、又講師を講演壇に案内するに致ししても、
宛然將軍家の御表に成らせられると云ふやうな行列で、誠にもの
のしいもので、仰山な同勢がその後引續く。總じて我が國のは儀
式的に流れる弊がありまして、恰も國務大臣から施政の方針でも訓
示された地方官が其の縣民でも集めてやるかの様な感じを持つので

あります。而してこれが皆それ／＼に役目でもあるかと申しませれば、唯だ單に一個の地位ある聴衆に過ぎない。勿論、その大多數は幹事とか、或は役員とか云ふ肩書は有つてゐます。が、講演の進行に就いては、何等の責任もなければ、何等の働きのないもの許りで御座います。

そこで——無造作に講師は出て来て、無造作に講演は終りましたが、こゝに初めて通俗講演たる性質の認められますことは、講演の終つた後に二三十分間、聴衆の自由討論と質疑とを許してをるところとか、或は水道税のことだとか、或は交通機關のことであるとか、或は警察の問題であるとか、さう云ふやうな問題になりませれば、聴衆もなかく熱心に、これに關する各自が達著した實際問題を持

ち出して来て、或は質疑し、或は討論すると云ふやうに、その眞面目さは丁度教場に於ける教師と生徒間の如き研究的態度で、互に批判し、研究するので御座います。これが實に非常に大きい成績を擧げて、ものに依りまして講師は繼續講演の終りに受験希望の聴衆には、その希望に任せて試験問題を提出し、これに通過したものには或一種の認定状、又は證明と云ふやうなものを與へて、以つて本人が社會に立つ便宜なる地位の向上に資してをるのであります。それから討論、又は質問が聴衆の方から無くとも、場合に依りましては講師の方から進んで質問を出して、徹底の程度を測りつゝ行くと云ふやうなこともあります。それに就いて、こゝに面白い實例がある——何でもセキスピアの繼續講演の時であつたと思ひます。が、その三四回であつたと記憶

してをります。私の腰掛けてをる真前に、必ず極つて席を占める一人の老婆がありました。その容貌並に其の服装に依つて、餘り富んでゐない、先づ伊太利移民の老媪であるといふことは察せられました。が、それと同時に、私は「かう云ふやうな老媪がセキスピアなど聞いて分るのか知らず」と疑つた。併し先方から申しますれば「何だ東洋の一青年にセキスピアが分るか」など怪まれたかも知れない。最初から私は席を定めてゐました。が、その老媪の席も亦變らない。毎回同一の席に前後して聴講してをりました。…その第四日目でありましたか、講演が終つて皆歸らうとする時に、講師はつかくと講壇を降つて来て老媪に、

「貴女はセキスピアに興味を御持ちですか」

と尋ねた。その突然の質問に對して、つゆ程も老媪は躊躇する處

なく、

「分りませぬ！」

と、如何にも率直に答へました。この意外なる返答を聞いて講師は、更に熱心に、

「それでは此の講演が貴女に、どう云ふ御満足をおさせ申しましたか」

と問ふた。その時に、例の老媪は、少しも臆する處なく、次のやうに答へたのであつた。

「…實は私の娘が高等女學校に入つてをるので御座います。處が學校から歸つて、晚餐の席に著きますれば、必ず其の日の出来事をお互に話合ふので御座います。が、近頃はセキスピアの脚本とかをやつてをるとか申しまして、頻りに其の話が出ますけれ

ど、私には少しも分りませぬ。併し私も娘の申す事位は分りたいと考へまするし、又娘の尋ねる位の事は答へてやるのが親の義務だとも思ひまする。が、私にはそのセキスピアと云ふものが分りませぬ。それだからと申して、今更に私がそれを讀むと云ふことも出来ませず、困つてをりまする處に、こちらで講演があると聞きまして參ることに致しました」

と如何にも眞面目に答へるので、その好い心掛けに、私は感心せぬ譯に行かなかつたのです。然るに其の老婆は更に語を續けて、

「これを聽いてをりますれば、娘の話したことが腑に落ちまするし、又成程ロメオとジュリットの戀仲は氣の毒なもの。ハムレットの心地はさこそあつたらふとも思はれます。お蔭様で其の後には晩餐の食卓も賑かに、楽しく話し交す事が出来るやうになり

ました。それで私は貴君の講演を非常に面白く、有益に聽いてをるやうな譯で御座います」

と語つた。この伴りなき老媪の返答を得て、講師は喜ばしさに今しもどや／＼と散りかけてをる聴衆を呼止めて、

「これだ！これが通俗講演の必要なる處であつて、かく活用されて話し甲斐もあれば、諸君の集まつた効果もあると云ふべきである」

と、語つたのであります。が、私はこれを聞いてをつて、如何にも「成程！」と能く會得が行きました。而して確かに紐育に於ける此の種の講演は最も徹底せる市民教育であつて、彼等が實際に働かせるものであると云ふことを實際に於いて知ることが出来たやうな次第で御座います。

回徹底せる會合　この伊太利移民の一老嫗の例などは、誠に通俗講演の如何に活用されてをるかと思ふ事實を知るに足る適切なものであると申し上げても差支ないと思ひます。その現れたると隠れたるとの相違は御座います。が、通俗講演に認めらるゝ特長は、殊にかう云ふやうな事實に活用せられると云ふ著しい點で御座います。世の講演者の實驗せらるゝことで御座います。が、今度の話は多少徹底したであらうと思ふやうなこともあれば、之に反して實に莫迦莫迦しい不徹底極まる話をしたと感ずることもあり、更に時としては「此の話が果して分つたかどうか、恐らくは不徹底であつたらう」と思はれるやうなことが少くない。かう云ふやうなことが往々にあ

るので御座います。又聴講者は其の話の徹底、不徹底を眼中に置かず、聴講者も——その話と自分との實際生活との間に、どれだけの關係を持つてをるかと思ふことを考へず、或意味から申せば、考へさせられずに、丁度溝越しに向岸の縁日商人か何かの呼聲を聞いてるやうな感じで聴くものも少くないので御座います。

かう云ふやうなことは、實に其の會合の目的から申しましても、或は講師の努力から申しましても、更に聴衆の時間を潰すと云ふことから考へましても、甚だ不經濟極まる話であり、無考至極でありくだらぬ結果だと云はなければなりません。然るに我が國にはそれが多い、それ故に講師は講演の徹底、不徹底と云ふ問題よりも、自分の肩書に對して、或は自分に排はれたる報酬に對して、又は其の會合の幹事に對する義理合丈けからして、ほんのお座なりを話して

しまい、聴衆は又折角催されたる會合の目的と云ふことも考へず、その潰した貴重なる時間の價値と云ふことも思はず、何か特に好奇心を満足させたとか、楽しみの満足と云ふやうな事があれば、それを以つてもう酬ひられたやうに思ふし、同時にそれがなければつまりらぬ目に逢つたと云ふやうに考へて、更に進んで之をつまらせるやうに考へやうとか、又は他日の此の種の會合をつまらせるやうに改めやうとか云ふやうなことは、全く考へずに散じてしもうと云ふ有様で御座います。

かう云ふ會合が我が國では普通と思はれてをるらしい。若しかう云ふやうな種類の會合を見て以つて之を「會合の本體」と考へるならばかの文學博士吉田熊次氏の説は、確かに道理ありと云ふて差支へないのでありませう。然るに之に反して、米國などの通俗講演の會合

に著しい特徴として認められますことは——聴衆の種類、それに依つて現はされる處の感じと云ふものが確かに徹底的であると申すことが出来るので御座います。

六

回婦人と聴講趣味　そこで特に私が愉快に思ひまする點は、米國に於ける會合には、伊太利移民のみでなく、前にも申述べましたやうに平均三十四五から四十五六と云ふ家庭を持つた婦人の眞面目な聴衆の多いと云ふ事で御座います。之れなどは少々特に論じなければならぬと存じます。米國に於いては、如何なる性質の會合に參りまして、殆んど講演を聞くと云ふ聴衆は十分の七割乃至八割は婦人、それも前に申上げたやうな年配の婦人なることであります。そ

れが科學講演でありましても、通俗講演でありましても、將又宗教講演でありましても、その聴衆と云ふ婦人が大多數であるといふことは、決して動かない實際で御座います。

このやうに婦人の聴衆が何故に多數を占めてをるかといふ問題になりますれば、米國に於ける男、又は女子と云ふ立場を御話しななければなりません。が、その現れたものに依つて根本を解釋して貰はなければなりません。所謂米國の婦人は「婦人を扶養するは男子の義務である」と云ふ觀念と「婦人を保護する」と云ふ十四五世紀頃の騎士的考へとが極端迄に働いて、下級者にあらざる限り、婦人なるものは、殆んど家庭労働にすら指を染めることを充分にしないのであります。

然るに彼等は「Shopping-Hour」と云ふものを有してをる。之れが彼等

の日常生活の半面を説明して餘蘊なしと思はれます。この買物時間と申しまするのは、毎日午後三時から五時頃迄を指すものであります。その時は訪問しても不在と云ふ事になつてをるので御座います。買物時間「Shopping-Hour」と申しますれば、買入物をする時間と善い方から考へますれば理屈が附きます。が、この「Shopping-Hour」なるものは、その實は婦人の小使錢の浪費時間で、この時刻になれば、猫も杓子も、若きも老ひたるも、必ず買物の有無に拘らず、皆下町に押出す、それが例の西洋人一流の大きな巾着をぶら下げて行くのであります。

この巾着をぶら下げて押出すと云ふ習慣は何時頃からついたものか分りませぬ。が、この習慣ある爲に、その良人は此の大きな巾着を満たしてをかなければならぬと云ふ事が歐米、殊に米國の宿六に

は苦痛で、又此の苦痛は甘んじて働かなければならぬ負擔とせられ
 てをるのであります。が、それで婦人であるものは、良人又は保
 護者から金を貰つて、この小使錢を如何に消費するかと云ふことが
 その毎日の問題であると申しても宜しいのであります。この問題
 は如何に一家の収入を按配すべきか、如何に子女の教養に盡すべき
 かと云ふやうな問題よりも、遙かに大問題でありまして、毎日考へ
 られてをるので御座います。

彼等は此の小使錢の使途の一方法として、考へ出されたる手段が
 幸に善い方に向いたものは慈善事業、各種の研究會合でありま
 して、随つて之等の活動、實行と云ふやうな方面に行くのでありま
 する。が、その中に入るものが又時間の潰方から申しましても、小
 使錢の使ひ處から申しましても、あらゆる種類の講演の聴衆となる

と云ふやうな結果になるのであります。かう云ふ次第でありますか
 ら、米國に於ける慈善事業にして、殆んど婦人の力の加らずして、
 出來てをるものは一つもないのみならず、その婦人の力は事業の九
 分九厘迄も及んでをると云ふことが一般を通じて普通と申して宜し
 いので御座います。

そこで私の知つてをる或牧師が此の事に就きまして私に「…大き
 く米國の社會を動かさうと考へた時、それが何種のものであらうと
 も、先づ婦人の助力を得る事なしには、決して成功するものではな
 いと云ふ事を多年の経験に依つて知ることを得た」と申されました
 が、堂々たる大都市に於ける最も有力なる大牧師ですらも、かく申
 してをる位でありますからして、確かの事實であらうと信ぜられる
 ので御座います。